

多摩大学設立の歩み

野 田 一 夫



目 次

はじめに

Rapport-0 7

{ }

71 78

校紋・校章について 79

野田一夫（のだ かずお）

1927年6月22日生まれ。1952年東京大学を卒業後、3年間同大学大学院特別研究生となり、1955年より立教大学に赴任、助教授を経て1965年同大学教授となる。この間、1960年より62年まで米国マサチューセッツ工科大学（MIT）IC、1975年ハーバード大学に招かれ、客員研究員として企業経営の国際比較の研究に従事。1970年財団法人日本総合研究所設立に当り、立教大学教授兼任のまま茅誠司理事長のもとで理事所長、1975年同研究所副理事長、1981年理事長となる。また1985年10月（社）ニュービジネス協議会設立時より1987年3月まで初代理事長。1989年4月多摩大学設立に伴ない、初代学長に就任。

■専攻：日本産業論、企業経営論、都市論 ■主要著書：
『日本の重役』ダイヤモンド社、『戦後日本の経済成長』
(共著)岩波書店(日本経済新聞社経済図書文化賞受賞),
『戦後経営史』(編著)日本生産性本部(日本経済新聞社
経済図書文化賞受賞),『財閥』中央公論社,『現代の経営』
(翻訳)ダイヤモンド社等

はじめに

多摩大学の設立に関し、設置母体であった田村学園の理事長田村邦彦氏からのご依頼に基づき、学長候補者となることをお引受けしたのは、昭和61年12月でした。それ以来今日まで小生は田村理事長に協力し、責任者として設立から開学に至るほとんど全ての業務にかかわって参りました。

私立大学の場合、慣例として、文部省の設置審査は少くとも2年にわたって行われます。結果的に多摩大学の場合は、私共の努力の甲斐あって設置申請から認可までの期間は最短で済んだわけですが、それでも、第1次の設置認可をクリアーした後、小生は田村理事長に提案申し上げ、同年12月には都心に「多摩大学開学センター」を設置し、最終申請業務の推進に万全を期しました。

同時に小生は、「開学センター」が開所した12月1日より、多摩大学設立関係者ならびに多摩大学に関心を向けて下さった方々に対して、毎週欠かさずハガキの一文“Rapport”を書き送らせて頂くことにしました。関係者には往復ハガキを用いたため、返信でいろいろ貴重な意見や提案を頂くことができました。心から感謝致しております。

お蔭様にて、多摩大学は昨年12月22日正式に設置認可を受け、今年2月、3月の2回にわたって行われた初の入試とともに33~35倍という当初の予想を大きく上廻る入試倍率を記録し、優秀な第1期生を迎えて無事開学の運びとなりました。この小冊子は、過去1年4ヶ月の間のRapport(1号~71号)を集成したものです。多摩大学にみる新大学設立の記録として、ご笑読賜われば幸甚です。

Rapport - 0

新事業としての大学の設立

野 田 一 夫

新大学の設立はなかなかの大事業です。設立の基本方針とかそれに沿ったカリキュラム案の作成といったことぐらいまでなら、いわゆる“机上のプラン”でできないことはありません。しかしいざこのプランを実現しようとすると、一方では用地の取得、校舎・設備の建設・施設、他方ではカリキュラムに沿った最適・最良の教員の確保、有能な事務職員の任用と管理体制の整備……と相当額の資金手当が必要となります。しかも、非営利法人とはいながら学校もまた1つの事業体である以上、収支採算も考えなくては、どんなに理想は高くても、結局は斜陽かまたは倒産の途を歩むことにならざるをえません。

加うるにわが国では、大学の設立は政府の認可事項に属し、そのため大学の設立を志さず当事者（設置者）は設立理念、カリキュラム案、全教員の業歴、設備概要（土地を含む）、開学後4年間の收支予算、以上を可能ならしめる寄付行為および以上を実証する証拠書類等々からなる厖大な申請書を提出して、文部省（および大学設置審議会）の審査を受けねばなりません。私立大学の場合は審査は少くとも2年にわたり、両年とも申請書提出に至るまでも、当局の細部にわたるチェックと行政指導を受けます。

設立業務が進むにつれて、当然のことながら関係者の数は増加してゆきます。事業が途中で早々と挫折てしまえば、関係者の範囲も限られており、おかげするご迷惑も軽微ですみますが、逆に事業が軌道に乗るにつれて、責任者の心の負担は加重されつづけます。いきおい彼は関係者に對して常に何かを訴えたい感情に駆られざるを得ません。小生の場合、それが自然にこのRapportを生みました。

開学まであと487日

各 位

野 田 一 夫

本日都心に「多摩大学教学センター」（千代田区麹町5—7秀和紀尾井町T B Rビル1210号, ☎239-0737, FAX262-7094）が開設されました。開学までに残された時間はあと487日です。小生は今日からここで数名のスタッフとともに、新大学の開学にかかる教学関連の準備一切をすすめて参る所存です。今後は縁あって同じ大学に集う皆様方のご協力を何かとお願いせざるをえないと思いますが、皆様方との基本的コミュニケーションの手段として毎週往復葉書にて小生の側より報告、提案、所感……といった一文を御送り申し上げます。時には皆様方から返信を頂戴できれば幸甚です。

ふり返ってみると、田村理事長から多摩ニュータウンの中に新設を計画中の大学の学長就任の御要請をいただいたのは、約1年前でした。文部省への申請までの日時もわずかしかなく、諸般の情勢から大学設立認可の条件も年毎に厳しさを増していくこと等を考えると、卒直に申してなかなか大変な仕事であると感じましたが、理事長御自身の抱負と情熱に共鳴し、何のためらいもなく「よしやるぞ！」という気になつたわけです。何しろ大学の設立は当事者の一存だけではすすめられぬプロジェクトです。昨年来小生は理事長とともに想像を絶する経験をいやという程味わった後だけに、去る8月中旬の新聞紙上で昭和64年度新設予定の大学の中に“多摩大学”の名前を見出した時の感激は実に一入ありました。ここ数か月、小生の関心と努力の的は専ら校舎等の建設工事です。施工の熊谷組の技術陣と一心同体となって頑張った結果、最近やっと満足のいくプランが出来上りました。近く御披露致しますので楽しみにお待ち下さい。

各 位 多 摩 大 の 名 称
野 田 一 夫

昨年11月、大学新設に関して文部省と折衝を始めるに当つて、まず決める必要があったのは名称でした。田村理事長から御一任を受けた日、小生は自宅に戻り、バスタブの心持よい湯の中に身を横たえて天井を見つめているうちに、ふと“多摩大学”という名称が頭に浮かんだのです。多くの方からこの名前がシンプルでしかも美しいひびきをもっていると言われたりすると、ホッとします。

旧制高校の学生の頃、小生は約半年、多摩川の畔に住んだことがあります。学徒動員で通った東芝府中工場の寮が偶然関戸橋（現在自動車で多摩ニュータウンに入る玄関口）の近くにあったからです。当時は太平洋戦争の末期で戦局は日増しつきびしく、生活物資は極度に乏しく、加うるに空襲におびえる毎日がつづいていましたが、それだけに、夜勤明けの快晴の朝など、寮の窓から眺められる多摩川の悠々たる流れと多摩丘陵の優美なたたずまいを見つめているうちに、何の理由もなく涙がこみ上げてきましたことさえ何回かありました。そんなわけで、小生にとって“多摩”は、多感な青春時代を想い起こさせずにはおきません。果して皆様はそれぞれ“多摩”にどんなイメージをお持ちでしょうか。

とにかく新大学の和文名称は小生の一存で決めさせて頂きましたが、英文名称を定めるに当っては是非諸兄姉の御知恵を借りたいのです。欧米人の常識や感覚からして、多摩大学のような規模の学校名に university を冠することはひどくふさわしくない気がします。できれば institute を用い、たとえば The Tama Institute of……といったふうに名乗りたいものです。創設時は“経営情報学部”のみですが、将来は学部の増設もあると考えると、余り分野を限定したくもありません。何かコレハ！という名案はないものでしょうか。

Rapport—3

昭和62年12月15日

地 の 利

各 位

野 田 一 夫

東京都多摩市聖ヶ丘4-1

これが多摩大学の所在地です。文字もひびきも申し分なく美しい地名だと信じます。しかも、この場所は最近「東京百景」の1つに選ばれたことが示すように、多摩丘陵の中でもとくに素晴らしい展望に恵まれ、晴れた日には西方遙か箱根、富士、丹沢、奥多摩、大菩薩、秩父、奥武藏といった山々があたかも連峰のように眺められます。

ありがたいことに交通も至って便利です。電車ですと、小田急、京王両線が合流する「永山駅」からわずか1.5キロメートル、公園・緑地を除いては周囲はすでに瀟洒な住宅が建ち並び、道路も広く、かつ整然とつくられているのでバスもタクシーも利用には事欠きません。電車なら京王新宿から聖蹟桜ヶ丘駅まで25分(特急、10分おき)、同駅から現地まではバスで10分です。自動車なら都心から高速道路を使って優に1時間で大学に到着することができます。

近い将来には京王線は橋本駅(JR横浜線)まで延長され、またモノレールが八王子駅と多摩センター駅とを結ぶ予定ですから、横浜、八王子方面からの当地への電車でのアクセスは更によくなる筈です。桜ヶ丘、多摩、東京国際、府中等多数のゴルフ場も至近の距離にあります。

多摩ニュータウンは将来人口30万人都市をめざす活気あふれる新興都市で、中心の多摩センター駅(永山駅の次)の周辺の文化・商業・レジャー施設の集積は仲々のものです。現在大学の設置可能な地域で東京都心にここより近い場所はありませんが、行政上の考え方があれ、何よりも都心に近く立地することは、私どもにとってもこれほど希わしいことはありません。多摩大は正に“地の利”を得たといえましょう。

時 の 運

各 位

野 田 一 夫

昭和68年度以降、わが国の大学をめぐる経営環境は、一転悪化が予想されます。“駅弁大学”の簇生以来つづいてきた戦後のわが国の大学新增設熱の二大基本条件が根底から揺さぶられようとしているからです。1つは、18歳人口の絶対数が67年をピークに大きく減少に転じ、今後長期にわたって増加が見込まれないことです。今1つは、18歳人口の一時的減少期にも大学進学者数を下支えしていた大学進学率の上昇もここ2~3年来頭打ちになったことです。

多摩大の設立はこうした時代的趨勢を十分見極めて計画されました。まず、前回も触れた立地選定の利があります。68年以降全国的に見た18歳人口の減少傾向の中で、南関東、とくに首都圏、更に多摩市周辺は当分の間この人口帯が縮少どころか増大することさえ予想されます。第2は規模の小さい大学の利があります。

多摩大の敷地は付属高校を含むしてわずか $50,000m^2$ 、学生数は収容定員で一学年160名（付属高校は同じく250名）、全国の大学の中でも最も小さい部類に入りましょう。しかし、これから経営環境の中で大学が僻地に大きい敷地と建物を持ち、多数の学生の満足をかちえることは至難です。多摩大は、小さいながらも、立派な教授陣と充実した設備をもち、すでに整備の終った周辺のコミュニティの人々を支持層とする大学として栄えることが理想です。

第3は専門分野の利があります。実用性・学際性・国際性という三大方針にのっとった“経営情報”教育の諸成果は、正に時代の要求を充すに違ひありません。第4、第5……の利は紙数の限りがあり、改めて書かせて頂きますが、多摩大の発展には“時の運”が力強く味方することを信じます。

人 の 和

各 位

野 田 一 夫

「地の利」「時の運」と標題がつづけば、次はやはり「人の和」です。大学と限らずすべて集団目的達成の成否を終局的に左右するものは、何よりも「人の和」に違いありません。

ところで、聖徳太子以来わが国で広く使われてきた“和”的真の意味を恐らくよくわからぬままに、小生は昔からこの語にある偏見を抱いて来ました。集団成員の間で意見の対立が起った場合、わが国ではとかく理非曲直を冷静に見きわめるよりは対立そのものを融和させようという気持が人々の間にひろがります。そんな時必らずといっていい程“マアマア主義者”が使う“和”という言葉を小生は大嫌いです。

多摩大の人の和は、そこに集う教職員1人1人の相互間の基本的信頼関係に立脚したいと念願します。この和を前提として、たとえば多摩大の教授会を夢みれば、小生の理想は誰もがそれを楽しみに待ち望むことです。会議ですからとくに面白くもない報告もありましょうし、時には議論に感情も入るでしょう。しかし必要なことは、会議の雰囲気を可能な限り楽しいものにしようとする全員の熱意であり、努力のくり返しです。この努力は必らずやわれわれ一人一人の身についた日常的行動様式になると信じます。

教授会を義務や義理でのためでなく楽しみのための時間にするには、単に会議の運営法や各人の口語表現力の向上努力といったことのみか、広い意味での“演出”努力（部屋の選定、家具のレイアウトから、飾りつけやBGM、茶菓サービスの仕方に至るまで）も要求されます。激しい意見の対立はあっても時を忘れてしまう程楽しい会議、これこそ意義のある会議であり、こんな会議をごく自然にこもてる人々の間にこそ真の“和”があるといえるのではないでしょうか。

一流大学を目指して

各 位

野 田 一 夫

新年おめでとうございます。

年が明けると、多摩大の開学が俄かに近づいた感があります。来年の今頃は新入生の募集活動や入試の準備でんやわんやだと考えると今から気が気ではありません。創る以上はわれわれの多摩大を一流大学に仕上げたいと念願します。ただし“一流”的基準は多摩大独特のものであります。

世に一流大学とは合格者の偏差値の高さとか一流と称せられる官庁や企業への就職者数の多さといったことを基準にしていよいですが、小生はそんなことはあまり気にとめていません。将来結果がそうなったからといって別に嘆く必要もありませんが、とにかく多摩大は、一定の基礎学力を前提として、

1. 何かに卓越している（個性）
2. 青年らしい人生の理想をもっている（活力）
3. 人間的魅力がある（人柄）

といった3点で一流の学生を集め、教育をすることが希いです。

したがって、基礎学力のテスト以外は論文と面接で入学者を選抜したいものです。とくに面接は是非とも3人とか5人といった複数の教授陣の判定に依りたいですが、全員一致の場合は別として、判定が極度に分かれる者についてはトコトン議論を尽くすべきだと思います。えてして“大器”といわれる人材はこのカテゴリーに入りがちだからです。

要するに多摩大がまず目ざすものは、われわれが“一流”と信ずる学生を集めることです。そのため大学設置の認可が下りるや否や、単にわが国のみか広く全世界の高校生の中から、われわれの基準に合うと思われる人材をあらゆるルートを通して推薦して貰い、人材を選ぶことも考えています。

以上の考え方に対し、諸兄姉のコメントを頂戴できれば幸甚です。

C S K情報教育センター

各 位

野 田 一 夫

C S Kといえばコンピュータソフトではわが国最大の会社です。そのC S Kの誇る一大情報教育機関が何と多摩大と目と鼻のサキに今年9月開所します。場所は永山駅（京王線、小田急線）から徒歩数分、敷地こそ1万m²ですが、総工費160億円を投じてつくられる延床面積3.2万m²強の施設は誠に充実しており「10台の超大型コンピュータを活用、1,000人を同時に教育、200人の宿泊施設をもつ……」という謳い文句は刮目すべきものがあります。

各業界第1線で活躍中の実務家、大学・研究機関の研究者をもって講師陣を編成し、各業種、各職能の実情に合わせて、各社の新人から中堅幹部、さらには経営者に対してまで必要な情報ならびに通信の利用技術について一貫教育が計画されています。多摩大はすでに昨年末C S Kと合意書をとり交し、開学の暁はC S K情報教育センターと密接な協力補完関係をきずき上げようとしています。

申すまでもなくわが国の学界には、いわゆる“产学研同”に対する抜けがたい偏見が存在しています。この偏見は、大学も学者も一般に極度に外っぽみで外部社会との接触に対して自信がないという事実から生まれたと思われます。多摩大はこうした日本の学界の因習的価値観や行動様式から全くフリーでありたいと念願します。

多摩大はあらゆる外部機関との協同ないし協力の機会があるごとに、常に是々非々の判断を下しうるだけの実力と自主性を確保しつつ、自らの短所を他機関の長所で補い、自らの長所を最大限に發揮して発展すべきではないでしょうか。C S Kとの提携は多摩大のこうした成長戦略の第一歩としてそのタイミングも内容も申し分のないものであると信じます。

図書御寄贈の御願い

各 位

野 田 一 夫

大学の新設に関し文部省が設置基準ならびに行政指導によって求める条件はなかなか細かくかつ厳しいものです。たとえば収容定員1学年160名の多摩大の図書館は2万3000冊(基準の1.5倍)以上の図書と125種類(基準の2.5倍)以上の学術雑誌を揃えねばなりません。それも単に数のみでなく、各分野ごとに一定数の専門書とか主要学術雑誌の過去5年間のバックナンバーといった具合に、揃える図書・雑誌についても注文がつきます。

この注文を簡単に充すことは困難であることから、その足元を見て大手書店の中には審査側の意向に沿うような図書・雑誌一式を取揃えることを商売にする部門があります。多摩大の場合も試みにある書店に見積りを出させましたところ、洋書を含めて予想を大幅に上廻る予算が提出されました。しかもその内容たるや、小生の分野ですと、審査が終り次第不必要となるもの、購入しても年間を通して恐らく閲覧者のほとんどないと思われるものが実際に多くを占めていたことには驚かされました。

日本の大学は一般に、財政が苦しい割に学術とか研究の美名のもとに首をかしげたくなるような金の使い方をします。この点多摩大は何としても限られた予算を有効に活用したいと考えております。そこで若し皆様方所蔵の書籍・雑誌類で多摩大に寄贈してもよいというものがございましたら、是非ともこの際御協力を賜わりたいものです。事務局では受入れに当たり詳細なリストを作成し、寄贈図書の内容を明らかにするとともに、将来寄贈者よりのいかなるお求めにも応じられる形で保管させて頂くつもりです。

御寄贈に際しては御手間を最少限にしたいと希いますので、何卒下記に御連絡の上一番便利な方法を指示賜われば幸甚です。

• 住所： 東京都世田谷区世田谷3丁目12番19号

青葉学園短期大学図書館

• 氏名： 司書 森 康子

• 〒： 03-429-8101

多摩大附属聖ヶ丘高校

各 位

野 田 一 夫

多摩大開学より1年早く附属高校である聖ヶ丘高校が今年4月1日に開校します。多摩大の用地は、多摩ニュータウンの聖ヶ丘地区が住宅地として開発されるに当り都立高校用地として残されていたのですが、都立高校が他地区につくられこととなったため、住宅都市整備公団より私立大学用地として多摩大の母体である田村学園に売却されたものです。

しかし住民の間にはこの地に高校設立の強い要望があり、結局売却に際し公団は附属高校併設を条件としたものです。もともと大学用地としてもさして広くない土地に高校を併設させられては、という御意見もありましょうが、別の考え方もあります。私は旧制高校がいわゆる“7年制”といわれた成蹊高校であったせいもありますが、中学、高校、大学と数年づつコマ切れでそれぞれ違った教育を受けるより、むしろ高校・大学は7年間一貫した方針で教育が行われた方がいいと考えています。とくに多摩大が目ざすような高度な経営情報教育は日本の現在の標準的大学教育のように一般課程2年、専門課程2年（しかも4年生の前半は事実上就職活動に終始する）では到底所期の目的を達することができません。

ただし、多摩大は経営情報の分野で“一流”を目指すわけですから、附属高校が同じ方針のもとにすぐれた人材を選抜し、充実した教育を行なうのが前提です。付属高校卒業生全てがエスカレータ方式で大学へ進学できるわけではないことも当然です。“外の血”を入れることはすべての場合、発展の条件と信ずるからです。先日附属高校の田村哲夫校長から頂戴した報告では、幸い初年度の付属高校の人気は予想以上で、入学志望者の質は高く競争率も相当な程度に達することのこと、聖ヶ丘高校の恵まれた門出を心より期待する次第です。

田村学園について

各 位

野 田 一 夫

私立大学の設立に当っては、学校法人が設立母体（設置者）となって文部省に申請がなされるのが慣わしで、多摩大学の設置者はすでに御承知のごとく学校法人田村学園（理事長田村邦彦氏）です。

田村学園の創立者は現理事長の父君に当られる田村国雄氏で、昭和12年に目黒女子商業学校を設立されて以来一貫して主として女子商業教育に尽力されました。同氏は昭和36年には教育功労者として文部大臣から表彰され、同45年には従五位勲四等旭日小綬章も受けておられます。現理事長も昭和58年に藍綬褒章を受けておられますから、田村家は2代にわたって教育界に一方ならぬ貢献をされてきたわけです。

現在田村学園は目黒学園女子商業学校と3つの幼稚園を直接に経営するほか同系列校として学校法人青葉学園（理事長・学長田村邦彦氏）の経営する青葉学園短期大学家政科・食物栄養科 学生数700人）・青葉学園幼稚園、学校法人渋谷教育学園（理事長・校長田村哲夫氏）の経営する渋谷女子高等学校・渋谷幼稚園・幕張高等学校・幕張中学校があります。

小生と田村邦彦氏を結びつけたのはわれわれの共通の友人岡昭氏（現在、東京湾横断道路株式会社社長）です。田村氏はここ4～5年来学校法人田村学園グループの中核となるような大学の設立を念願され、その推進力となる教学側の責任者についての相談を旧制高校・大学を通じての同窓生である岡氏にもちかけたところ、岡氏の心の中にすぐ小生の名前が浮んだわけです。岡氏の紹介で田村氏と小生が始めて御会いしたのは一昨年11月中旬であったことを考えますと、よく一年余りで大学新設計画をここまで進めてこられたものだと感無量です。

諸兄姉御一人御一人のこれまでの御協力に改めて感謝申し上げる次第です。

多摩といふ地名

各 位

野 田 一 夫

多摩大の設立を思い立って以来、当然のことながら“多摩”といふ地名の由来について関心を抱き、折あるごとに人に聞いたり文献に当たったりしてきました。これまで一番興味をひかれたのは、博識をもつてなるある友人の言でした。彼によると、多摩はもともと多麻、麻の多い場所という意味で、その由来は、昔上方から朝廷の命で布を織る工人の集団が関東へ送られた折、彼らが原料の多生するこの地を見つけ、多麻と名づけて住みついたからだというのです。

昔織布は最先端技術だったわけで、多摩地区は歴史的にハイテック・センターであったのかと喜んだわけですが、残念なことに、東京都庁や多摩市役所にある資料には、上述の説を裏づけるものは何もありません。万葉集には、九州の防人へ出陣して行く夫を思いやる妻の歌として「赤駒を山野に放し捕りかにて多麻の横山歩（かし）ゆか遣らむ」とあるように、たしかに多麻の文字が使われていますが、多摩川上流の丹波山の発音がなまって多麻になったというのが、どうやら定説らしいのです。

どなたかこの事について御存知なら、お教え下さい。何れにせよ多摩地区は無土器時代から既に先人が住んでいた遺跡があり、また歴史の上では、鎌倉時代に、鎌倉と武藏とを結ぶ街道の関所が今の関戸橋ぎわに置かれて以後、宿場町が川をはさんで発達することになったようです。町から眺められる丘陵はその優美なたたずまいの故に、眉引山とも呼ばれたと伝えられます。

再び入試方法について

各 位

野 田 一 夫

目下日本は北から南まで大学受験シーズンの真只中、小生も今週は日曜日から立教大学の試験監督に駆り出され、緊張した顔でセッセと答案に記入している受験生の姿を眺めながら、来年の多摩大の入試について、いろいろ想いをめぐらせました。

先日 *Rapport* 6 で、一流大学を目指す多摩大独自の学生選考基準について私見を披瀝申し上げましたところ、予想外に多くの方から御批判なり御意見を頂戴し、嬉しく思いました。とくに、いわゆる偏差値の軽視が基礎学力の軽視に陥らないようとにかく、面接で人柄を見抜くことはいかにもつかしくかつ危険であるとか……多数貴重な御忠告には恐縮いたしました。

ところで小生は、何か“一芸に秀でた”人材には、それが大学の教科目と関係のない分野での能力発揮であっても、合否の選考に当って十分考慮を払う価値があるという考え方を依然として強く持っています。もちろん秀で方に関しては、万人が納得できる実績（たとえばスポーツでいえば、全日本高校チャンピオンであったとか、音楽や絵画でいえば、国際コンクールで金賞をとったとかといった）でなければ意味はないと思います。

大学での教科目に関係がある分野ならなお更、権威がありかつ信頼のできる学外の機関の資格なり査定結果に最大限依存することをもっと真剣に考えるべきではないでしょうか。それぞれの大学で入試問題をつくり、試験の実施、採点、選考……といったものに莫大な時間と手間と費用をかけるより、たとえば英語なら、英検準一級とか TOEFL 580 点以上の取得者には試験免除、また英検二級とか TOEFL 550 点以上の取得者にはそれなりのメリットを与えるといった事は、十分意味のあることと信じます。他の分野で信頼できる資格なり検定には一体どんなものがありましょうか。御教示下さい。

多摩大の建築構想

各 位

野 田 一 夫

多摩ニュータウンの中でも聖ヶ丘地区は一番の高台にあります。しかも多摩大および付属聖ヶ丘高校の敷地はこの地区的最も高い尾根筋を走る街道に面した約 1 万 m^2 の急斜面と約 4 万 m^2 の全く平らな造成地とで構成されています。尾根街道と平地との高低差は 14~15m ほどありますから、街道沿いに北西から南東に向って展かれた 150 度の眺望は、たしかに“東京新百景”の 1 つに数えられるに足るだけのものがあります。

小生がはじめてこの眺望に接した一昨年の 11 月中旬の或る日、折から北風が吹いてその季節にしては肌寒かった黄昏れ時で、西方遙か実に見事な夕焼けを背景に箱根、丹沢、富士、大菩薩、奥多摩、秩父……の山々の濃紺のシルエットが絵のように連っていました。この息を呑む程荘厳な風景に見とれているうち、小生の体内には或る種の旋律が走るとともに、心の中にはこの地に出来上る建物群のイメージが瞬時に浮び上りました。

「そうだ展望台だ。平地部分にはなるべく尾根街道沿いに長大な 4 階建のビルをつくり、尾根街道とビルの屋上との間に人工地盤をわたして広大な展望台にしたらよい。そして建物の最上階かペントハウスに学内食堂を設けよう。恐らく日本の大学の学内食堂でこれほど眺望のよいところはない筈だ……」とひとり想像をめぐらしながら、小生は思わず興奮していました。

多摩大の建設工事を施工するのは熊谷組の技術陣ですが、私とのはじめての会議で私の構想を聞くとすでにその時点でつくられていた設計方針を全面的に改めて下さり、小生の構想を最大限生かす方向で短期間のうちに、私の期待通りの素晴らしい基本計画をつくり上げてくれました。次回の *Rapport* で多摩大の校舎の特徴を御説明させて頂きます。

レストランとクラブ

各 位

野 田 一 夫

限りのある広さの土地に限りのある額の予算で限りのある期間に建物を建てるわけですから、建設工事にとって何よりもまず必要なことは基本理念ないし構想であります。これがない工事はありきたりのプロジェクトです。施工者は出来上りのまずさを予算とか土地とか時間に転嫁するのが常です。私共が残りの人生を賭けてつくり上げようとする多摩大学の建物が、ありきたりであってよいわけはありません。

いま小生と熊谷組の技術陣全員の心の中には、幸いはっきりとした多摩大キャンパスに関する共通の長期的 ideal があります。来年4月の開学までに実現するものはその一部ですが、それに対した時、全部が実現する将来を誰もが待遠しく思うものであつてほしいと希っています。何の理想も感じとれない完成品には我慢がならないが、心ゆるがす理想さえ感じとれれば未完成品でも十分満足できるという考え方沿って、近く建築申請は行われる筈です。

多摩大の教職員や学生が、外部の人々に当分自慢していい施設は学内食堂と図書館とスポーツ・アリーナの3つです。食堂が眺望絶佳の場所にできることはすでに前号で御紹介しました。しかも“学生食堂”といった佗びしいイメージのものではなく、外形・内装とも新しくオープンした“素適なレストラン”という感じに完成させるのが目標です。当面建物の最上階(4階)に予定していますが、近い将来その上にペントハウスをつくり、教職員とゲストのくつろぎと交流のための faculty club を含む2フロア直結のアメニティ・スペースとして利用することを考えています。

次回に図書館とスポーツ・アリーナについて御紹介します。

図書館とスポーツ・アリーナ

各 位

野 田 一 夫

櫻ヶ丘カントリークラブの前を通る 2 車線の道はすぐに広い川崎街道にぶつかりますが、信号を直進するとそこが、多摩丘陵の最高部を走るいわゆる“尾根街道”（都道 138 号線）の起点です。はじめ趣きのあるゆるい下りがつづくこの道は、一転急なカーブの道にかかり、上り切ると突然眺望が開けて、行手に多摩大のシンボルタワーの優美な姿があらわれます。

ただしこの情景は、多摩大の開学に必要な第 1 期工事が来年 3 月末完了してからの話です。シンボルタワーの足下に隣接して、緑したたる前庭と約 40 台の駐車場をもった素敵な郊外型レストラン風のクラブ・ハウスが完成するのは、もう少し先のことでしょう。しかし、多摩大の誇る図書館とスポーツ・アリーナは第 1 期工事の中に含まれています。スポーツ・アリーナは多摩大建物群の中心に位置します。テニス、バスケットボール、バレーボールの公式試合のできるコートと 1,000 人以上の観客席をもち、自然光の入るガラス張りの天井に覆われた巨大なアトリウムで、各種セレモニーもイベントもできる多機能空間として利用されます。一方図書館は意味のない蔵書よりは快適なサロン風閲覧スペースの実現に重点をおきます。

図書館の開館時間は日本で最初の年中無休を目指し、多摩大の直接関係者のみか、近隣に住む知的な人々が進んで会員となって利用することを楽しみにもし、誇りにもするような場所にしたいと考えています。図書館のラウンジと学内食堂のそれとは建物の 4 階で共通の広いアメニティ・スペースとしますから、必然的に一部の料飲サービスも 24 時間型となり、両者は今、展開しつつある情報化社会の望ましいライフスタイルをつくり上げてくれるに違いありません。

教室と研究室

各 位

野 田 一 夫

実は先週、10日程の米国出張から帰国したところです。留守中頂いた御意見・御提案に対し電話も差し上げられませんでしたこと御許し下さい。しかし、昨年12月1日以降、小生の*Rapport*は1回も欠かさず毎週火曜日に投函されてきましたから、今回の出張の前には3回分、昨年末・年始に2週間日本を空けた際には、実際に4回分の原稿を事前に書いて出かけたわけです。

Rapport 13, 14, 15号の3回は集中的に多摩大の建築の特徴について御説明しました。教室とか研究室については一言も触れませんでしたが、別にそれらを軽視しているわけではなく、また、それらがありきたりであってよいと考えているわけでもありません。教室や研究室には予算上とくに重点を置きはしませんが、他大学に比べればハード的にもソフト的にも一味違った工夫をこらしたいと考えます。

教室では教える者と教わる者との社会的距離をいかに近づけるかにまず最大の努力を払いたいものです。とくに教室の規模が大きくなるにつれて、教育はとくに紋切り型の講義に終始するようになります。天賦のスピーチ・テクニックの持主でなくても、何故か気持よく自分の意思を伝えられるような空間的条件を具備した大教室ができればしめたものです。

研究室にも革新が必要です。狭い個室に粗末な机と椅子、書架やケースに収まりきれずに部屋中にあふれた本や書類、環境に凡そそぐわない形で搬入されたワープロの悲喜劇的姿……。「研究室は諸悪の根源である」と言われることのないよう、機能的にも卓越した居住性も抜群な教員用居室の条件とは何かを、諸兄姉各自で真剣に考えてみて下さい。

大学のハードとソフト

各 位

野 田 一 夫

今春開学する附属聖ヶ丘高校の校舎はもうほとんど仕上っています。いざでき上った建物を近くで見上げると、予想していたよりは大きく堂々としており、外壁のタイルもサッシュもその色といい質感といい申分ありません。床面積で約3倍の規模の大学校舎の建築も近く着工されますが、全てが完成した時の壮観が今から楽しみです。

ここ数年わが国でよく使われる“ハード”と“ソフト”という表現に従えば、多摩大のハード(建物)に関しては、どうやら見透しはついたようです。あとは内部空間(内装、設備、什器等)の問題が残っていますが、本体工事程苦労することはないと思われます。そこで、残りの1年、われわれはソフトの整備に全力を傾倒する必要があります。

ソフトの最たるものは教授陣であります。未だ最終申請以前なので、多摩大教授陣の全容を公表できませんが、最近の新設大学はもとより既存の大学と比べても、一般教育・専門教育課程とも最高水準にランクされるものとひそかに自負しています。次にソフトとして教授陣の水準と同等の重要性をもつのは学生の質です。われわれは一方で画期的な入試方法の開発に努めるとともに、今年12月下旬に予定されている正式認可までに完全な広報体制を整え、来年の今頃はわれわれ皆が教育者としての情熱と期待を湧き起させられる若者たちを、多摩大の第1回生として迎えたいものです。

ところで、教師と学生をつなぐ教科目の内容、教育方法、教師の教育能力……といったソフトは、日本の大学ではこれまで意外に軽視されてきました。だからこそわれわれは、この面でも多摩大の最大の特色を發揮したいと考えます。何なりと諸兄姉の具体的御提案を切望します。

多 摩 大 学 校 歌

各 位

野 田 一 夫

校歌というと何か紋切り型の歌詞となぜか楽しくないメロディーを連想させます。それ故に、果して今の時代学校が校歌をもつ必要があるのか、という意見にもそれなりの説得力があります。

しかし他方、傑出した歌詞とメロディーの歌があり、それが人々の間で広く歌われている間に、この歌が実はある学校の校歌だということになれば、話は別です。恐らく大学のよきイメージの形成、知名度の高揚にとってこれほど効果のあるものはありません。

そこで多摩大では、歌謡曲の作詞家としては空前の実績を残された阿久悠氏に多摩大校歌の作詞を御願いしました。幸い同氏は小生の古く親しい友人の1人ですので、いろいろ面倒な注文を聞いて頂き、やっとこの程頂戴したのが以下のような作品です。

“この輝ける日々よ”

心に翼を見つけた日から
あした
明日はまぶしい光にあふれ

翔び立つ夢を語るのも 彼方の世界想うのも
今あればこそ 今生きてこそ
この輝ける日々よ いつまでも
この輝ける日々よ いつまでも

瞳に希望を映した日から
時代は魅惑の友だちとなり

流れる風に急ぐのも 移ろう季節に迷うのも
青春あればこそ 青春生きてこそ
この輝ける日々よ いつまでも
この輝ける日々よ いつまでも

この歌詞にもとづき今三木たかし氏に作曲をお願いしてありますので、必らず素晴らしい校歌となることを確信しています。

どうか歌ってみて下さい

各 位

野 田 一 夫

阿久悠氏が多摩大のためにつくってくださった校歌の歌詞は先号で御紹介しましたが、先週の金曜日の午後、三木たかし氏がその歌詞につけた曲の楽譜とテープをもって、わざわざ小生の事務所を訪ねてくださいました。音楽の世界で仕事をしている友人たちも同席してくれて、三木氏が自らギターを弾きながら歌う多摩大校歌を皆で何回も聴きました。素晴らしい音楽性の高いメロディーだと思いませんか？ ただ校歌として齊唱するのにはキィが高すぎるよう感じられる等、今後多少のアレンジが必要と思われます。以下が三木氏直筆の楽譜です。どうか歌ってみて感想をお聞かせ下さい。

Handwritten musical score for a school song (校歌). The score consists of five staves of music with lyrics in Japanese and Romanized English. The lyrics describe the school's name and its location. Key signatures and time signatures are indicated above the staves.

Staff 1:

ニミチにわざ てを - オトコトツヤウム リ
おじてはすぶ じい - ひの ゆい - みる みる く

Staff 2:

E♭ / A♭⁷ / E♭ / B♭⁷ / E♭ / E♭⁷
おじてはすぶ じい - ひの ゆい - みる みる く

Staff 3:

C♯m / Gm⁷ / Fm⁷ / B♭⁷ / E♭ / E♭⁷
おじてはすぶ じい - ひの ゆい - みる みる く

Staff 4:

Gm⁷ / B♭⁷ / C♯m / Gm⁷ / B♭⁷
おじてはすぶ じい - ひの ゆい - みる みる く

Staff 5:

E♭ / G⁷ / C♯m / E♭ / A♭ / B♭⁷ / E♭
おじてはすぶ じい - ひの ゆい - みる みる く

教学センターの今後の業務

各 位

野 田 一 夫

この*Rapport* 20号をシンガポールへの機上で書いています。成田へ出発する前、田村理事長も出席されて、昨年来目黒の田村学園内に設置されている「設立準備室」の職員（男性4名、女性2名）と「教学センター」の職員（男性4名、女性1名）との初顔合わせが行われ、これで来年4月に予定されている多摩大設立のための準備体制はほぼ完全に整いました。

準備室は、文部省への申請書類の作成を中心としたいわば総務部的職能、センターは、特色ある一流大学をつくるためのハード・ソフト両面の企画・推進的職能と大まかな役割分担がありますが、両職能は車の両輪というよりは相互にオーバーラップするところが多く、今後1年密接な協力のもとに大目的の達成をはかる所存です。センターの職員は尾高敏樹、後藤一美、近藤隆雄、飯田健雄の専任4氏と渡辺明美さん（日本総合研究所よりの出向）、職能は大別して次の8項目です。

1. 教育内容—①コース別履習を前提とした科目構成と担当役員、②時間割、③教科別教育案
2. 選抜・入試—①選抜入試の方法、②入試問題、③入試場所
・要員
3. 大学規則—①教務、②学生、③教員各規則
4. 図書館—①図書館システム、②購入図書、③設備
5. 教室及び付帯設備—①研究室利用システム、②教室サイズ、
③各室設備
6. 対外収益事業—①地域教育、②寄付講座、③設備寄贈範囲
7. 広報活動—①広報基本スケジュール、②プレスリリース、
③大学概要、④文書様式、⑤広報方式
8. 教員調書—①未提出者への督促、②調書整理
上記各項の原案作成と諸調整。

Be Student-Oriented!

各 位

野 田 一 夫

大衆社会、ないしはそれを超える“分衆社会”の消費関連産業にあって、成功する企業の鉄則は1つ、それは to be Customer-Oriented です。

常に顧客のニーズを把握し、そのニーズを充すような商品を提供しつづけないかぎり、どんな技術も、どんな営業基盤も、どんな人材も所詮は企業繁栄の戦力たりえないわけです。

営利法人である企業と非営利法人である大学との差はあれ、法人繁栄の鉄則に変りはない筈です。企業にとっての顧客は大学にとっては、授業料を払う学生です。従って新設の多摩大学が発展するための鉄則は1つしかありません。それは to be Student-Oriented です。だが、18歳人口の自然増と異常な大学進学熱といった戦後の恵まれた環境の中にあって、既設の日本の大学の大部分は、名門・新参を問わず、この鉄則の実行を怠ってきたように思われます。

企業にとって主力商品に当るものは大学では講義、したがって、商品リストに当るのがカリキュラムであります。日本の大学の中でカリキュラムと個々の教科目を、学生のニーズ、あるいは卒業生を受け入れる社会のニーズとの関連で、たえず真剣に検討し改良の努力をしている例はいくつあるでしょうか？また教授の教え方とか講義の内容が学生にとってどれほど満足を与える、また教育効果を生んだかに細かい神経を使っている例がいくつあるでしょうか。

多摩大は日本の大学のこうした在来の慣習を是非打破したいものです。「大学は“研究の府”である前には“教育の府”である」という大前提に立ち、教育を求めて集った若者に対し可能なかぎり満足のいく学生生活と教育成果を与えること、これこそ多摩大の最大の目的であると信じます。

年間講義案の提唱

各 位

野 田 一 夫

大学のカリキュラムを構成する各教科目の中には、多かれ少なかれ相互に内容的に関連をもつものがあります。各教授は当然自分の担当科目に関連のある科目的教授を（学部ないし学科の）同僚として知っている訳ですが、にもかかわらず、日本の大学では通例各自の講義の内容、進め方、あるいは教育方法……について、共通の受講者である学生の立場から「何がベストか」「何をどう改善したらよいか」といったことを調整する仕組みもない上に、担当者間で私的にとことん話し合う機会もきわめて少ないようです。

結果的に、講義の内容には担当者間で精粗の差がはげしく、相互関連性が明らかにされず、そのことが教育の効果を低めるのみか、時には学生の勉学意欲まで沮喪させてしまっていることも稀ではないと思われます。多摩大に関しては、教育の基本方針としてこの弊を徹底的に排除したいものです。まず週1回の講義の場合は実際には年間で25～26回程度にしかなりませんから、各教授は各自の1年分（もちろん半年分のこともあります）の講義内容を各回に分けた概要（年間講義案）をつくり、関連科目ごとに集ってそれぞれの年間講義案をつき合わせ、内容の調整（そしてできれば進め方とか教え方についての十分な意見交換）を行ないたいものです。

小生は決して教育内容や方法の画一化を希うものではありません。知識人、とくに教育者は普通人に比べて個性的な人物が多く、学生が学校でその個性に触れることが重要な教育の要素と考えています。しかし、今の日本の大学のように教育内容や方法を教授に一任してしまうことが、「単位さえ取れば…」という安易無気力な学生をたくさん輩出している原因であることもまた否定できないのではないでしようか。

教授陣の構成

各 位

野 田 一 夫

目下教学センターがとりくんでいるのが「第2次設置申請書」の作成ですが、今年は全教員の個別審査が主眼となっているだけに、教員予定者の方々から提出して頂いた“調書”を基に、形式・実質とも完全に近い書類にしようと日々努力をつづけております。

ところで、いよいよ最終的に固まった30名の教員予定者の構成を眺めなおしてみると、“一流大学”を新設するために私共が貫いてきた方針が見事に反映されているようで、心嬉しくなります。まず年齢ですが、40歳代の10名を中心て60歳代6名、50歳代8名、30歳代5名、20歳代1名で、平均年齢は47.5歳。新設の大学としては平均年齢も若く、かつ世代のバランスもよくとれています。

次に出身大学ですが、何と18大学に散らばっており、東大6名のほか、3名が名大と慶應、2名が中大、京大、立教で、残りの12大学が1名づつ。これだけでもいわゆる“学閥”的ニオイすらないわけですが、2名以上の大学について卒業した学部をみると、東大は工・理が各2名、経・文が各1名づつ、名大は法・経・工各1名づつ、慶應は文2名、経1名と全くの“能力主義”的構成となっているのにはいたく満足しています。

最後に教員全員を卒業した学部別に分類すると、さすがに経の6名が一番多く、次いで工・法の各4名、各3名が商・文・理、2名が音楽、教養・社会が各1名、何と10学部に亘っている状態です。

多摩大の研究・教育上の特色の1つは“学際的”アプローチ、しかも古い大学にありがちな大御所教授の“権威主義”とは永遠に無縁でありつづけたいだけに、開学後も末長く教授陣のこうした構成には、全員でとくに配慮しつづけたいと念願します。

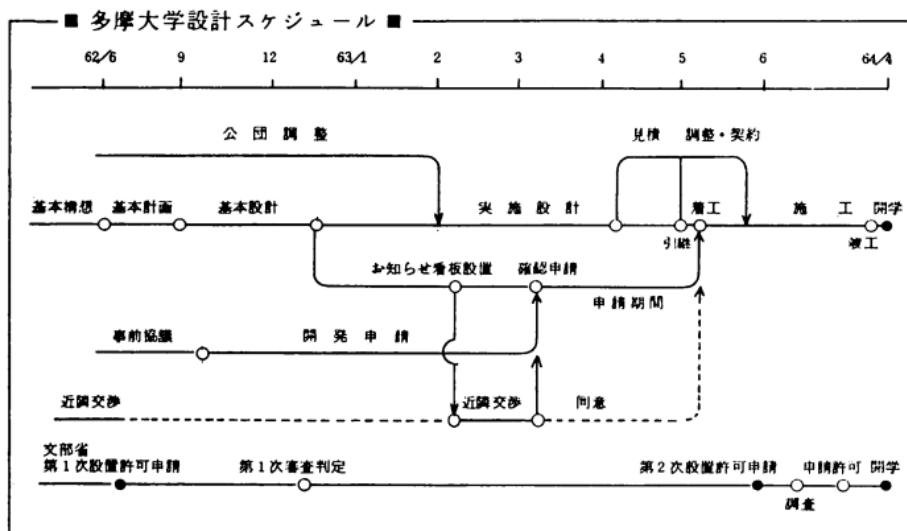
施工者の苦労

各 位

野 田 一 夫

ゴールデン・ウィークいかがお過しましたか？小生は10日ほどイタリアを旅し、いまヴァチカンで要職にあるヨゼフ・ピタウ師（元上智大学学長）やフィレンツェに住む塩野七生さん（作家）と旧交を温めてきました。御二人とも来年開学する多摩大に大きな期待を抱いて下さっています。開学後はあらゆる意味で多摩大を是非ともこういう各界のすぐれた方々を胸を張つてお迎えできるような大学にしようではありませんか。

ところで、われわれがゴールデン・ウィークを楽しんでいる間も熊谷組の“多摩大プロジェクト”チームの方々は、工事着工をはさみほとんど休日を返上で仕事ととり組んで下さったとのことです。このくらいの工事となると、ざっと記しただけで「設計スケジュール」は下図のように、工事着工までには実にさまざまな手順を踏まねばなりません。どうか熊谷組のスタッフの方々の労をねぎらい、心からの応援を送って下さい。



大学教員の経済的報酬

各 位

野 田 一 夫

とくに日本では、教養を尊ぶ人々は“カネ”的話をしたがらません。“給料”的話はなお更要注意です。しかし皮肉にも、特別な場合を除いて、人は誰でも“収入”的ことを何も気にしないで生きてはゆけません。新設の多摩大に集う人々は教職であれ事務職であれ、常勤であれ非常勤であれ、その貢献に対して経済的報酬を得ます。その金額と公平感とは、1人1人の多摩大に対する帰属意識ないし満足度の最大の根拠となる筈です。

だからこそ、小生はいつかは Rapport でこの問題に対する考え方を諸兄姉に提示させて頂き、諸兄姉の忌憚のない御意見を聞かせて頂きたいと希ってきました。今号で始めて小生はこの問題に触れます。とても1回では済むはずはありません。どうか皆様からも積極的な御意見を御送り下さい。

教職員各自が多摩大から受取る経済的報酬の水準は、大きくは多摩大の收支状況、小さくは人件費の“原資”的問題に帰着しますから後へ過し、まず“公平さ”から議論しましょう。教職員のうち職員の方々の報酬についても、当面教学センターの担当業務外であるとしてさておくことにしましょう。

そこです、「大学の常勤教員とは主として“サラリーマン”なのか“自由業”なのか」から検討を始めたいと思います。前者ならば、報酬額を左右するのは時間的拘束なのか、教育活動の質なのか、教育以外の仕事の負担なのか、そしてそれらを評価する方法はあるのか……、後者ならば、所属する大学での教育以外の外部活動はどこまで“自由”なのか、変動収入に対してサラリー（固定収入）をどのように対応させるべきなのか……、こうした根本的な問題の検討の上に、多摩大教員の経済的報酬に関し、最大多数にとっての“最高に公平”なシステムを究めてみようではありませんか。

常勤・非常勤の報酬格差

各 位

野 田 一 夫

周知のごとく、日本の大学では常勤教員に比して非常勤教員の経済的処遇は著るしく劣るという慣習があります。しかも、この格差を正当化する理由は全然ありません。非常勤教員の講義内容も教え方も概して常勤教員のそれより劣るということはありません。むしろその逆が実情かも知れません。その上非常勤教員は勤務状態(休講、遅刻等々)によってすぐに対応措置がこうじられる反面、米国の大学などと違って日本の大学では常勤教員の教育的怠慢ないし無責任に対しては最大限目をつぶるということが普通です。

多摩大は他に率先してこの悪弊を除去したいものです。大学は“教育の府”であり、とくに私立大学は与えられる教育を期待して授業料等を納入した学生(の両親)によって主たる経済的基盤を支えられている一種のサービス事業である以上、現場で教育活動にたずさわる教員は、常勤も非常勤も一心同体となり、常に教育の成果に対して配慮を払う必要があるからです。

すなわち、カリキュラムは、単に学者・専門家の立場からみて体系だっているのみか、時代の流れをよく反映し実際界の要求を充しているかどうか、個々の講義は全体としてのカリキュラムの方針や体系に沿って行われているかどうか、講義の内容はその充実度と教え方において学生の満足を得ているかどうか、といったことは実質的に大学の盛衰を左右することを、誰もが銘記する必要があります。

したがって、教育活動の対価の 1 つとしての経済的報酬に関しては、多摩大は常勤・非常勤の格差をもうけないことを原則としたいものです。その前提で常勤の教員の平均的給与所得が他大学の水準を超えるために何をすべきかを、とくに常勤教員の側から徹底的に考えてみようではありませんか。

事務を重視しよう

各 位

野 田 一 夫

先々号から始めた経済的報酬への私見の提示をこの号でもつづけるつもりでしたが、先週来生じた一連の出来事からいささか感づるところあり、1回だけ経済的報酬論を中断して標記の件について書かせて頂きます。

文部省への多摩大の第2次(最終)設立申請書の提出期限は来る6月30日と迫って参りました。準備室では小数のスタッフが厖大な仕事をかかえ日夜頑張っています。しかし、設立準備室が先月来教員予定者の方々から必要書類を頂戴する過程で、残念ながら小生の心を痛める事務上の問題がいくつか生じました。

事務の基本は、それが企業であれ学校であれ、組織の目的・目標を明確に理解し、その達成にむかって最適な手順・方法を定め、継続的に実行することにありますが、何よりも大切なことは、事務の対象者への“思いやり”であります。たとえば大企業に籍を置いている方々が「所属長の承諾書」を得るために、手続きをすすめるためだけでどれほど複雑なステップを踏む必要があるか、予想以上の時間を費さざるをえないか、また時には退職の意思表明をすることの社内的反応にまでいかに気をつかわざるをえないか……といったことに事務方が十二分配慮して事を運ばねばなりません。さもないと、双方にとつて必要な書類を整えるに当って、微妙な不快感ないし不信感が生まれてしまうからです。

不幸にもそういうことがあったと仮定して、私共はこれを「災をもって福と転ずる」契機にしたいと考えます。大学は企業等に比べて“事務”を軽視し勝ちです。したがって、今後仕事の量と質に対応して人材の充実・育成、事務システムの近代化を他校に先がけて実施に移していくことは、多摩大学発展のために最重要的戦略であると信じます。

再び経済的報酬について

各 位

野 田 一 夫

再び経済的報酬論に戻ります。報酬といえばふつう給与・ボーナス等金額で示されるものを指しますが、人が組織から得ているものには社会的地位、個性発揮の機会、人間関係、時間的余裕……等々金銭には換算できぬものが含まれています。したがって、人が組織の成員として満足感を抱きうるか否かは、その人の欲求構造に応じて微妙に異なる筈です。

この視点から多摩大の経済的報酬体系（狭義には給与体系）を考えてみましょう。企業であろうと学校であろうと、自立的な収支採算単位である以上、成員の経済的報酬の総額、つまり原資には自ずから限界があります。しかも企業の場合には戦略とか努力によって業績を上げ、原資をふやす余地が多く残されていますが、学校の場合には収入は原則として学生の納付する授業料等で、成員の知恵や努力によって原資をふくらませうる余地はごく限られています。（但し、多摩大の場合はこの余地をいろいろな形で開発してみたいと考えています）

となると大学の場合、結局、経済的報酬論は、個々の成員の欲求構造に応じて原資をいかに公平に配分するかということに帰着します。かといって、欲求構造は客観化しうるものではありませんし、たとえそれができても、欲求構造に応じて、個々人ごとに異った額の経済的報酬を準備することはとうてい不可能です。しかし少なくとも実施したいことは、成員が組織内で果す役割に応じて異った報酬体系をつくり、各自がそのどれかを選択できるという方式です。たとえば教員に関しては、教育上の負担に公平を期した上で、学内で教育外の職務に就く場合には経済的に厚く、また学外で狭義の教育以外の活動を希望する場合は時間的に恵まれるといった原則に立った画期的報酬体系をつくってみたいものです。

大学教授の本業とは

各 位

野 田 一 夫

和製英語“サラリーマン”をとくに定義すると「毎月定額の給与を受取って働くホワイトカラー」ということになりますか。すると、大学教授もこのカテゴリーに入ります。しかし、日本の大学教授には一般サラリーマンのように毎週月～金曜まで所定の勤務時間が義務づけられてはおらず、長期有給休暇も夏、冬、春と格別に多く、学期中といえども（規定上はともかくとして）講義等で大学に来なければならない日が週せいぜい 3～4 日程度、それも普通“出勤日”とか“勤務時間”といったもので拘束されているわけではありません。

以上わが国では、一般的のサラリーマンに比べて大学教授は時間的に極めて自由な上に、（とくに私学に関しては）勤務時間外の活動に対し他国に例をみぬほどの自由が慣習的にみとめられています。暗黙的には、この自由は学術研究に励むためのものでしょうが、大学教授でなくとも立派な学術研究の成果をあげている人は全国にクモのごとくいるわけですから、大学教授のみに特権が与えられてよいわれもないように思われます。

日本では“学者であること”が大学教授の必要条件とされていますが、やはり教授の職業は学者ではなく“教師”であります。大学は収入の大部分を教育に依っている以上、教授は専任・非常勤を問わず、大学の本業を支える大黒柱です。したがって、多摩大教授陣は水も洩らさぬチームワークによって他校の比肩しえない教育成果をあげ、それによって、他校の比肩しえない経済的報酬を確保したいのです。また日本の私大では教授に対し雑務から管理業務に至るまで教育外の負担を負わす慣習がありますが、多摩大はこれに關しても公正妥当な対価のシステムを確立し、他校に範を示したいと念願します。

多摩大の経済的報酬システムに関する御意見を待望します。

研究の府としての多摩大

各 位

野 田 一 夫

すでに何回も強調させて頂きましたように、多摩大は「何よりも大学は教育の府である」という基本方針のもとに、全教員協力してユニークかつ高度な教育の成果をあげたいものと念願しておりますが、他方大学としての多摩大に対する内外の評価は、単にこうした教育の成果だけで確立されるものとも小生は考えておりません。大学である以上、多摩大は“研究機関”としても一流を目指すべきです。

ところで教育の場合と違って研究の成果をあげるに当っては、全教員が協力一致するような目標を掲げえない悩みがあります。教員として多摩大に集う方々はすでに研究者としてそれぞれの分野を定め、成果をあげてこられました。“経営情報学部・経営情報学科”としてのカリキュラムに沿って各教科目ごとに適任者を選んだという点では多摩大の教授陣容は、既設・新設のどの大学にもヒケをとらないと信じますが、だからといって、この全教員をうって一丸とする研究プロジェクトといったものはとうてい存在しないわけです。

わずか30余名の教員で広汎な教育分野をカバーするわけですから、いってみれば1人1人が違った分野の研究者であるともいえますし、関連分野ごとにくくっても、せいぜい5つか6つ程度にしかならないであります。そこで先ず考えられることは、(1)1人1人の教員がその分野において研究者として高い成果をあげるために大学として為すべきこと、(2)いくつかの分野で何人かの教員が協力して推進する価値のある共同研究プロジェクトに対して大学の為すべきこと、の2つに対して当初より多摩大としての基本方針を定め、それを制度として実施に移すことあります。この点諸兄姉のお考えを是非伺いたいものです。

各 位

自由と真理

野 田 一 夫

わが国ほど大学の教授や学生が“学の自由”とか“真理の探求”という用語を多用してきた国はありません。“学の自由”とは言論とか表現の自由が一般大衆に許されていない状況下でこそ深い意味がありますが、現在の日本のように、すべての自由があふれすぎていては、事実上死語と化してしまっているといえましょう。“真理の探求”に至っては昔から大学人の思いあがりか、いい逃れの表現以外の何者でもありません。

多摩大では、これらの2つの用語の代りに“教育外活動の自由”と“実用性の探求”を掲げてみてはどうでしょう。すなわち多摩大の教員は週の中定められた何日かは徹底してよき教師に専念したあとは、各自の個性を最も發揮しうる仕事の領域で思いきり活躍し、その成果を存分に教育と研究の業績の上に反映して頂きたいものです。それぞれの活動が、教育者であるとともに研究者であることを社会的に要求されている大学教授にとってどれほど必要であり、またふさわしいものかどうかは、各自の良識で判断して頂くほかはありません。もちろん多摩大の教授会の構成メンバーの良識の限界を超える場合においてのみ、時には自制をお願いすることも起ってきましょうが、「待った！」のかからぬかぎり、各人の活動は自由です。

“真理”に関して小生を一番納得させる考え方は、米国のプラグマティズムです。すなわち、「現実に真に役立つことの中に真理がある」という考え方ほど研究者にとって厳しい評価はありません。直接にせよ間接にせよ、現実に真に役立つことに対しては、世の中は必ずし報いてくれます。研究者もまた、世の中に貢献することによってのみ、研究に必要な費用を十分調達できる筈です。多摩大は自力でゆとりある研究体制をつくり上げようではありませんか。

各 位

わが友中村秀一郎氏

野 田 一 夫

去る6月30日、私共は多摩大学設立に関する最終（第2次）申請書を文部省に提出いたしました。この書類作成に関し教員予定者の方々におかけした御迷惑に対し改めてお詫び致すとともに、御協力を心から御礼申し上げます。あとは万事が順調に進み、12月には正式認可がおりることを信ずるのみです。ひでいちろう

それにつけても今回、学部長をお願いする予定の中村秀一郎氏について、小生の尽きぬ感謝の気持を込めて書かせて頂きたく思います。産業論や経営学の分野での同氏の優れた業績は広く誰もが認めるところです。しかし氏に接した人は誰でも、氏の明るくかつ実に温かい人柄に魅せられます。小生も幸い同分野の先輩としてすでに20年以上も氏を敬愛しつづけてきました。

したがって、多摩大の設立に関し田村理事長から正式に御依頼を受けた直後、最初に御相談したのが中村氏でした。まさか氏自身が定年を6年も残して専修大を去り、多摩大へ移って下さるとは夢にも思っていませんでしたが、話すにつれて意気投合し、「残りの人生を飾るにふさわしい、素晴らしい大学をつくろう」と固く手を握りました。忘れもせぬ一昨年12月下旬のことでした。

ただ小生のように立教で何の拘束もない身と異なり、中村氏が多摩大へ移る意思表示を公的に行いえたのはたしかにごく最近になってからです。しかし実際には、大学設立にかかる繁雑極まる、かつ精神衛生にわるい仕事を小生が責任者としてどうにかやってこれたのは、終始中村氏の献身的協力があったからです。互いに何十回となく頭をひねり、激励し合い、手分けして行動した波乱の1年半を顧みる時、小生にはすべての苦労は洗い流されて、たしかめつくされた“男の友情”的爽やかさのみが心を充してくれます。「ヒデさん（と小生は呼んでいます）本当にありがとうございます。これからも頑張ろうぜ！」

全教員が一目置くような事務職員を
各 位

野 田 一 夫

第 2 次設立申請書を文部省に提出してみると、改めて気にはなるのは、秋口に予定されている設置審でのヒアリングや実地検査のことでもなければ、年末の認可の成否でもありません。むしろ、認可がおりることを前提として、来年 4 月までにやらねばならぬ各種各様のそして庞大な量の準備業務をどうこなしていくかということが、小生の心に重くのしかかっています。

6 月末締切りの申請書を文部省所定の形式にのっとって作成するという業務だけでも、卒直にいって在来の事務体制には荷がかちすぎていたようです。したがって田村理事長ともご相談し、なるべく近い将来、設立準備室（目黒）と教学センター（麹町）を一体化した新体制を整え、主要職能ごとに適材適所の人材を配して正々堂々の陣容で開学へ向けて歩を進めるつもりでおります。この新体制と人材は、多摩大が設立された後、所期の目的を達成するためにも絶対欠かせないものと信じます。

日本の大学、とくに私大では、教員と事務職員との間に一種の慣習的身分格差が存在し、人材が比較的事務職員になりたがらないためか、あるいは学校側が事務職員に人材を求める努力をしないためか、本来事務職員が占めるべき管理ポストまでとかく教員が兼務することすら普通に行われてきました。元来学者志望がふつうである教員には、事務能力はもとより、管理能力を備えた人は稀ですから、教員は教学に専心し、学校運営は完全に事務職員の手に委ねることこそが多摩大の理想です。

この理想に向っての第 1 ステップは全教員が一目置く程の才能と活力（職能的知識・経験はもちろんですが）を兼ね備えた人材を何人か事務方の要職に置くことです。彼らによって他校の比肩しえぬ事務システムがつくり上げられれば、教員はすでに申分ないだけに、多摩大の発展は間違いない筈です。御推薦頂けそうな人材をご存知なら、ご一報下さい。

各 位

国語表現力の重視

野 田 一 夫

“意気投合”が“意気統合”，“形式”が“形成”と，このところ *Rapport* 文中に毎回誤植が目立ち，恐縮至極です。何れも FAX, ワープロといった文明の利器に頼りすぎるためと反省しております。それにしても，言葉で自分の思っていることを表現するということは，知識の内容が高度化し，複雑化するほど難かしくなります。これまで日本の大学教育は，高度にしてかつ複雑な内容の知識を優先し，それを的確に表現できる能力の鍛磨をひどく軽んじてきたように思われます。

バイリンガルといわれる人々を除いて，地球上の大部分の人々は，自分の生れ育った国の言葉以上に外国語を使いこなせません。とくに日本人は“外国語音痴”といわれるだけあって，中学から大学卒業まで 10 年間，英語を強制的に教えられても，話す，聴く，書くはもちろん，まともに読める能力さえ身につけられる人は稀です。このため“英語教育法”的改革が言われて久しいわけですが，多摩大はひとつこの分野で，独自の方式を打ちたてたいものです。と同時に，多摩大は学生に対して，どこの大学よりも，日本語で的確に話し，かつ書けるという“表現力”的鍛磨に教育の重点を置きたいものです。

かりに或る人が大学教育を受けたにふさわしい思想なり意見をもっていたとして，外国人にそれを伝えようとした場合，中途半端な外国語は逆効果でしかありませんが，彼が的確な日本語でそれを表現さえできれば，ベテランの通訳（ないし翻訳者）を通して，彼の思想や意見は外国人に感銘を与えます。“不完全な日本語と全く実用性のない外国語”，これまで日本の大学が久しく無意識に選んできたこの組合せだけは，多摩大としては何としても避けたいものです。

外国語教育への提案

各 位

野 田 一 夫

誤植のお断わりをした先号の文中で bilingual がバイリンガルとなっていたこと、汗顏の至りです。丁度このところ、多摩大の入試方法を設立準備委員の面々と議論していて、バイリンガルという用語をよく使います。歴史的・地理的に異文化との交流・接触が自然にさかんなところ程バイリンガルが多く、少くとも外国語に対して抵抗がないと思われます。

現在先進国といわれている国々の中で、日本は唯一の非西歐国であるとともに、最も異文化との自然的交流・接触の行われてこなかった国であるといえましょう。隣国である韓国とか中国の言葉を使いこなせる日本人の数は西欧人が考えられない程少数であることが、その何よりの証左といえます。にもかかわらず、歴史的にみて日本人は、異文化に対しては異常な関心を抱き、一方的ながらその摄取を怠ったことはなかった筈です。明治開国以来、日本人の对外関心は圧倒的に欧米先進国に置かれ、その文化摄取の基本的手段として、英・独・仏語が高等教育の中で必須課目とされて今日に至っていますが、今もって日本人の中で独・仏語はもとより英語すら使いこなせる人は、限りなく少ないといえます。

多摩大の外国語教育（当面英語と中国語のみですが）は、以上の現実を冷静に見つめた上で特色を打出し、かつ効果をあげるべきです。すなわち、将来志望する職業からみて必要と判断され、かつ本人も希望する場合には、実用性のある外国語を徹底的にたたき込み、逆に、そうでない場合には、外国語修得の負担をなるべく軽くしてやることです。入試の内容にもこの方針を反映させ、極端に言えば、必須課目の中から外国語を除くことすら提案したい程です。とにかく、中途半端な外国語の修得ほど、空しいものはない信じます。

新設大学の抱える矛盾

各 位

野 一 夫

大学設置の認可は毎年12月20日過ぎで、当然のことながら、それまでは新設大学は表立って一切の広報活動をすることを許されません。大学入試は原則として2月、3月両月ですから、新設大学が受験生、またはその父兄、高校や塾の先生方に対して、理念、特色、強味……等々を伝えられる有効期間は、せいぜい1月あるかないかです。新設だからこそ広報活動が必要不可欠であるのに、その期間が十分与えられないことは、実に大きな矛盾です。しかし、慨嘆するよりは知恵で勝負するに如くはなしと、私共多摩大の設立準備委員は、すでにやるべきこと・やれることを着々実行に移しておりますから、御安心下さい。フタを開ければ、必らず何千人という受験生が応募する筈です。ところで、何よりも優先すべきは入試の方式です。

多摩大は入学志願者を選考するに当り、いわゆる“偏差値”よりは各人の個性的な能力、とくに“一芸に秀でていること”に重点を置くという基本方針を堅持します。しかし、入学者全員が高校卒業程度の基礎学力を存分にもっていかなければ話になりませんし、また好むと好まさるとにかかわらず、偏差値中心につくり上げられてきた現行の受験体制に目をつぶるわけにも行きません。そのため、実用国語（理解力、表現力）、外国語（何国語でも可）、その他科目（地理、日本史、世界史、政経、数学の中、本人の得意とする一科目）に関し基礎学力テスト（入学試験）を行いますが、どの科目にも優秀者加点方式を導入するとか、客観的に評価できる過去の能力実績（専門知識・技能からスポーツ・芸術・芸能まで）を公正に採点して一番不出来だった科目的点数とふり換えるとか、他校がまだ試みたことのない制度を案出しつつあります。

いずれ案がまとまり次第諸兄姉の御意見を頂戴するつもりです。よろしく。

学生の質とは何か

各 位

野 田 一 夫

教育の効果は、教える側の能力と熱意もさることながら、教わる側の能力と熱意によって大きく異ってきます。つまり、どんなによい教授陣を揃え、考えぬかれたカリキュラムに沿って教育努力を行っても、学生の質が低くては、大した効果は期待できません。そういう意味で、少くとも日本で“一流”といわれる大学は、二流、三流といわれる大学に比べて、教師よりは学生の質に大きな差があります。ひとたび“一流”的な格式を得た大学は、いろいろな形で教育内容の水準が低下してもなかなか社会的評価が落ちにくいのは、多分そのためです。

一流大学を目指す多摩大は、何としても質の高い学生を確保せねばなりません。但し、学生の質はいわゆる“偏差値”的高さではきまるとは思いません。特定の教科目の総合点が人間の能力を表わすわけではありませんし、また、かりに相当程度そうであるとしても、長い一生から考えると、社会に出て何らかの職業でそれらの能力が発揮されなければ、能力は無かったに等しいからです。

したがって多摩大にとって“質の高い”学生とは、①必要最少限以上の基礎学力、②肉体的・精神的健康、③人柄の魅力、を前提とした上で、①何かで人並みを超えていくこと（個性）、②青年らしい人生の理想に燃えていること（向上心）、③物事と積極的にとりくむ姿勢を有していること（活力）、という3つの人間的属性に要約できると信じます。「そんな青年がザラにいるのだろうか」、「どうしてそういう青年を見つけるのか」という御質問が必らず出ましうが、私共はそれを論ずるためにも、多摩大にとっての学生の理想像を明確にしておく必要があります。偏差値中心主義を否定しただけでは、かえって質の高い学生を逃してしまった危険性を増大させるだけだからです。

新しい途を拓こう
各 位

野 田 一 夫

先週水曜日(10日)の各紙朝刊は、64・65年度開設申請の出ている公・私立大学・短大の新設、学部・学科の増設、定員増について、文部省が大学設置・学校法人審議会に諮問したことを、一斉に報じました。この記事に関して、来年度新設を予定されている私立大学7校の中に、多摩大の名前を見出された方も多いかと存じます。

設置審の今年度審査はこれからですから、正式認可のおりる12月中旬まで不用意な言動は一切さしひかえたいと思いますが、私共は必らず認可のおりることを信じて万全の準備をすすめています。早急に結論を出すべきものの一つは入試の方法で、その概略は先回御報告した通りです。

大学入試で目下世間の話題は、65年度から「共通一次」に代って「新テスト」が導入されること、また「新テスト」に対する文部省の熱意にもかかわらず、私大の多くが参加を渋っていること……等々「新テスト」に集中しているようです。「新テスト」は今年末に試行される筈ですから、予定通り来春開学すれば、多摩大はこの試行テストの結果をよくよく検討した上で「新テスト」への態度をきめるつもりです。

「新テスト」への多くの私大の反対は、この結果はっきりしてしまう入学者の点数で各大学が序列化されることに、大きな原因の1つがあるようです。新設の多摩大は既設のどの大学をも目標にする気もありませんし、張り合うつもりもありません。

開学後多摩大は、教授陣・教科内容においても、設備・運営方法においても独自の途を歩み、その成果によって“大学の序列化”という世にも愚かな慣習に一石を投じたいものです。多摩大の目標は、行き詰った日本の大学制度に新しい途を拓くことにこそあるからです。

前車の轍を踏まず

各 位

野 田 一 夫

夏は旅の季節、旅の行き帰りの徒然を慰めるべく乗物の中で日頃手にしない週刊誌などをひもといっていると、結構“大学”に関する記事が掲載されており、自然に関心をそそられます。しかし、読み進むとその内容は、参考になるどころか失望と慨歎に終るものが多いことには驚かされます。たとえば週刊誌の中では最もまとま部類に入るといわれる『週刊朝日』の最新号には「内紛で辞める青木法大総長の嘆き節」と「深夜テレビでイビられる高千穂、国士館、駒沢大ほかのお気の毒」といった記事があります。

前者は法政大で、経済学部および社会学部がキャンパスを都心から郊外へ移転することに関して教養部との間の内紛が深刻化し、その收拾をしくじった総長と3常務が引責辞任したことを報じたわけですが、文面は明らかに大学一般の経営能力の欠如を揶揄するかの如く、「どこの大学でもよくあること」という青木総長談話でしめくくっています。後者に至ってはもっと低次元で、ある深夜テレビ番組が、偏差値の低い大学の特性をとらえては徹底的にイビりまくりギャグの対象にし、若者の人気を拍していると報じながら、愚弄された大学関係者の怒りの言を掲載することで、かえって、これらの大学を嘲笑の的にしています。

教授達が本務をすべて内紛にあけくれる大学も、学生達が勉学を忘れて日々遊び呆ける大学も、開学にあたっては創設者がそれなりの理念をかけ、知恵と努力をかたむけたことを思うと、多摩大の設立責任者の一人である小生の心中はおだやかではありません。理念を失っても企業には営利という目標があります。しかし理念なき大学は社会的には無用どころか害悪でしかないと信じつつ、開設のためせざるをえない限りのない業務ととりくんでいる毎日です。

再び「前車の轍を踏まず」

各 位

野 田 一 夫

先号の標題を電話で印刷所に伝えたところ、仕上った葉書は「前者の轍を踏まず」となっており、教養ある諸兄姉に対し穴があれば入りたい気持で不愉快な一夜を過しました。今朝早速訂正の意味をも含め、40号の速報版を御届けする次第です。

こんなことが起るものも、最近多忙なため十分校正に時間をかけ、心を傾ける余裕がないからです。以前、原稿は日曜に書き月曜に印刷し、火曜に発送していた *Rapport* ですが、最近はひどい時には火曜に書き、印刷し、発送する慌しさです。何でも追いつめられて仕事をすると、とかくボカは避けられません。*Rapport* の誤字誤植程度なら大事に至りませんが、これが多摩大が広く世間に配布する資料となると、私共にとって致命的なことにもなりかねません。

大学の設置が正式に認可されるのは、慣例によると毎年12月中旬すぎです。それまでは当然のことながら、一切の広報活動は禁じられています。しかしそうはいっても、12月下旬となれば、年末とそれにつづいて正月、少なくとも約2週間ビジネスが停止してしまうわけですから、2月の入試に向けてのあらゆる広報活動の準備は、設置認可の時点では完全に終了しておらねばなりません。

このことが分っている筈なのに、これまでの新設大学の例でみると、12月中旬までにすべての開学準備（校舎の建設工事等は別として）が完了した例は意外に多くありません。結果は、内容・体裁ともみぐるしい印刷物となったり、受験生ならびに父兄の方々の首をかしげさせるような事務上の不手際になったりする訳です。この面では多摩大は、教学センターと設立準備室が協力して、“前車の轍”を踏まないための努力を傾けております。何卒、開学準備に関しあ気づきの点があればどしどし御指摘下さい。

設立準備いよいよ本番へ

各 位

野 田 一 夫

9月の声をきくと、多摩大開学の準備作業は一段と慌しさを増した感があります。8月中旬に開催された設置審の教員審査の審議結果に基づいて、近く文部省から何らかの指示をいただくことになっており、私共はすぐそれに対応せねばならない上面に、建物から校具・備品に至るいわゆるハード面での審査に対して、万全の準備を整えねばなりません。

対役所対策のみではありません。入試の時期・方法の大綱は既にきまつたものの、具体的実施の手順、体制等の検討はこれからです。入試とのかかわりにおいて、設置認可以前ながら、制度・慣習のもと許される範囲内で可能なかぎりあらゆる広報活動に知恵と努力を払わないと、質のよい受験生を大量にひきつけることができないおそれがあります。

今ひとつ気がかりなことは、来年4月に着任される教職員の方々の受け入れ態勢です。研究室なり事務所といった職場の物理的環境は校舎の建築工事の進捗を待つほかはありませんが、今のところその青写真すらほんやりとしか描けません。200人近い新入生に対し、少くとも50人以上の人々がサービス集団として働くための組織体制の整備も、急がねばなりません。

規程類の整備の中でとくに急がねばならないものは、給与規程であります。教員はもとより職員の方々でも、多摩大へ来られるに当っては相当な夢なり期待をもって意思決定されたに違いありませんが、それでも人間には誰でも生活がありますから、来年4月以降の生活設計ができると、御本人はともかく奥様方に不安も生じましょう。

そんな訳で、近く教学センターと設立準備室を発展的に解消し、これまでよりずっと充実して強力な設立準備体制がつくられる予定です。乞御期待。

各 位

本学案内書第 1 号

野 田 一 夫

御承知のごとく、大学設置の認可権が文部省にあるわが国では、毎年慣例として正式認可がおりる 12 月中旬以前には、新增設の学部・学科に関して大学が広報活動をすることが、原則として禁じられております。ただし、これも慣例として、翌年度の大学入試が受験生、父兄、高校教員、進学塾の先生方……にとって緊迫感を増し始める秋口には、主として受験誌等の求めに応じて必要最少限の情報を提供したり、あるいはそうした情報をとりまとめたリーフレット類をつくって関係各方面へ配布することは行われてきました。

他校はどうであれ、多摩大はこれまで、その筋からの御注意を頂くような行為は一切やってきませんでしたし、今後もそれをやるつもりはありません。そこで、この程受験情報を専門とする某社が全国の高等学校受験指導教員に配布してくれる資料のために、新設各校に伍し、はじめて簡単な案内書を印刷致すこととなりました。それを数日中に諸兄姉にも参考までに一部お送り申し上げます。実はこの案内書は、田村理事長の要請を受け、大日本印刷の協力を得て、内容・様式とも小生が責任をもって仕上げたものですから、何卒返信用ハガキを利用され、忌憚のない御意見なり御批判を頂戴できれば幸甚です。

もちろん、教授陣とか教科内容とかに関して具体的なことは、現時点では一切触れることができぬわけで、その分責任者である小生にとっても物足りませんが、その代り広中平祐氏が進んで対談の相手となってくれたり、エズラ・ヴォーゲル氏が心のこもったメッセージを寄せてくれたり、永年の友人のおかげで内容の濃いものとなりました。また大学の全景や主要部分のベースも解説文とともに「多摩大とは何か」を知る上で、最も手軽な手引書の役割は果してくれるものと信じます。

学生消費者主義

各 位

野 田 一 夫

Rapportも回を重ね、読者の方々からの反応もいろいろな形をとって尻上りの傾向にあります。本や論文の御紹介にも度々接しています。最近頂戴してとくに参考になったのは『学生消費者の時代』（喜多村和之著、リクルート出版）です。著者は広島大学・大学教育研究センターの教授ですが、一昨年から昨年にかけて1年間カリフォルニア大学（バークレイおよびU C L A）に客員として滞在され、その間、米国の大学をとりまく経済的・社会的環境条件の変貌と、それに対する大学の優れた対応例をじっくりと観察してこられたようです。

コンシューマリズム

題名をハーバード大学の社会学者D.リースマンの“学生消費者主義”から採られたのは、19世紀末から1970年代までつづいてきた教授団による大学の実質的支配権が、1980年代の米国では“消費者としての学生”的手に移ろうとしている現実を、著者が如実に体験されたからに他ならないでしょう。しかも本書執筆の意図は、単に米国の大学事情の紹介ではありません。米国以上の環境変化の中にありながら一向それに目覚めず、旧態依然のあり方をつづけている日本の大学に対する大いなる警鐘こそ、著者の狙いと思われます。以下の一文に同感し、感激しました。

「(最近の米国では日本に比べ、大学が学生を“真の顧客”として実に大事に扱っている。しかも)このやかましく、気まぐれで、しばらなければみずから勉強しそうにない学生を、大学の信用と威信をそこなわないようカレッジ・メイド・マンに仕上げるために、大学は全組織をあげて、教育に力を注がねばならない。アメリカ社会は、どの大学にいたというだけで無条件にその卒業生の価値を信用してくれるほど、甘い社会ではないからである」

いつか多摩大教授団の研修会で喜多村氏を囲み、じっくり話し合いの時間をもちたいものです。

小さい大学・大きい理想

各 位

野 田 一 夫

前回御紹介した『学生消費者の時代』の中で著者の喜多村和之氏も指摘されていますが、米国の大学とは対照的に日本の大学では、教育がとことん教授本位に行われ、しかも、講義内容、教え方、勤怠……等に対する学生側からの評価の仕組みが全くといってよいほどありません。したがって、古い大学ほど、教育者としては不適、無気力な人々が教授の座に悠々あぐらをかく傾向にあり、このため、学生の勉学意欲は大きく減退しがちです。

この点、新設大学にはたしかに救いがあります。すなわち、大学新設に当っては、大学設置審議会が全教員について、各教科目を担当するにふさわしい業績、経歴があるか否かを細かくチェックするからです。しかし、設置審といえども、各教員の教育者としての適性、技倆、そしてとくに熱意といったことまではチェックできませんから、新設大学としても、実は安心できないのです。

大学をとりまく経済・社会環境が急速に厳しくなる時期に、私共の多摩大は、大きな理想を掲げて小さく誕生しようとしています。小さいということは、1学部1学科だけで学生収容定員わずか160名ということから自明ですが、大きい理想の最たるものは、教育の成果(=優れた人材の育成)によって、国内的にはもとより国際的にも“一流”と評価されることです。

これは果して大それた理想でしょうか、私は全くそうは思いません。現在の日本では、一流と称せられる大学ですら、教育の成果において、世間からはもとより当の学生からも芳しい評価を受けてはいないからです。多摩大の設立をすすめるに当って私共は、教授陣の構成には心血を注ぎました。希わくは、この大きな理想が、“ツブより”的教員各自の理想として、いつまでも強くその心の中に燃えつづけんことを……。

開学センター開所
各 位 野 田 一 夫

10月に入り、いつしか開学までに残された時間はわずかに179日になってしまいました。幸いこの間開学手続きは着々と進み、昨日は設置審の委員と文部省の担当官による最後の現地審査も無事終りました。あとは12月中下旬の認可を待つのみです。

しかし、今後のことを考えると、やることは山積しています。何よりも気になるのは入学試験です。収容定員は160名と定められていますが、受験者の数は定められていません。「多々益々弁ず」とは思いませんが、受験者が多い方が私共の希望に沿った人材選別の幅は拡がりますし、受験料収入も大学財政にとって軽視できません。受験雑誌によると、多摩大学の評判は新設校として上々らしく、したがって、来年度の受験者を私共は2,500名～4,000名ぐらいと考えています。

何れにせよ大変な数で、入試手続きや問合せに始まり、入試の実施、採点なし判定、合格者発表・通知、入学者受入れ準備……と考えると気が気ではありません。それに入試準備だけでなく、すべての開学準備となると仕事量はその何倍にもなり、人も時間もいくらあっても足りないわけです。そこで入試を含め開学準備のための人と時間の効果を最大ならしめようと、今回“設立準備室”と“教学センター”を合併し、「多摩大学開学センター」を下記のごとく発足させることに致しました。

開学センターが今度入居することになったビルは「多摩センター駅」（新宿から「永山駅」の次）から、徒歩わずか5分多摩ニュータウンの核心部ともいべき業務プロックの中に位置し、何かと便利な上に、何よりも環境がよいので、気に入っています。どうか何かの機会に、御立寄り下さい。

住所：（〒206）多摩市鶴牧1-24-1 新都市センタービル1階
電話：（0423）72-8877（代表） FAX: (0423)72-8866

本学入試の概要 各 位

野 田 一 夫

去る4月から関係者の間で検討を重ねて参りましたが、本学の入試は、来年2月から3月にかけて3回（延べ5日間）にわたって、下記のごとく実施される予定です。

第1回（推薦入試） 2月1日

受験者は、在学中の学業成績またはなんらかの能力発揮の実績の故に、出身学校長より推薦を受けた人々に限られます。但し、推薦をする高校の範囲は、関連校と指定校のほか公募に基づくものも含まれますから、誰にでも推薦される機会があります。試験科目は「小論文」「基礎学力」「面接」の3つで、合格者の総数は収容定員の50%を超えないことも定めました。

第2回（一般入試1次） 2月5日、6日

受験者は推薦入試の対象者を含め、原則として高校卒業者および来年3月卒業見込の人々ですが、本学の場合は外国人、帰国子女、社会人を含め、上記と同等またはそれ以上の学力ありと認められる人々に最大限入試の門戸を開放しています。試験科目は両日とも国語、外国語のほか選択1科目（数Ⅰ、日本史、世界史、政経の中）ですが、5日の場合は、現在の高校教育および大学受験勉強の内容に沿った出題を、また6日の場合は、本学の大学教育を受けるにふさわしい基礎的学力、素養、常識の有無をテストする出題を行うことにより、入学者のタイプに可能なかぎりバラエティを期待しています。

第3回（一般入試2次） 3月11日、12日

一般入試2次の内容は1次と全く同じですが、本学が2次試験を行うのは、1次だけで質の高い合格者を揃えることはむづかしかろうという懸念のためでは決してありません。いろいろな理由で1次試験を受けられなかった人材に本学受験の機会を与えることによって、少くとも入学定員ワクの数十%は、この2次試験受験者のために残しておく考えなのです。

前文に偽りなきを期し

各 位

野 田 一 夫

すでに御手元に届いている筈の多摩大の案内書の前文最後に「多摩大学に最もふさわしくないものは，“偏差値”中心の入学試験と……」と記しましたが、来年の多摩大の入学試験の問題傾向とか合否判定基準は“偏差値”と全然関係ないのかと問われれば、もちろん「ない！」とは申し上げられません。その最大の理由は、日本全国優に100万人を超す大学志望者（高校生および浪人）は、好むと好まさるとにかかわらず、“偏差値”中心の受験勉強に精を出しているという事実です。

彼らの努力を無視することは大量の（善意の）受験者を失うことになります。そこで多摩大は本学の特色を出すために、「高位加点制度」（各科目ごとに非常に優秀な成績を収めた者に対し自動的に何十%かを加点してアドバンテッジを与える制度）とか「低位振換制度」（前者と逆に、高校在学中何かで非常に優れた実績を示した者は、その実績に評価点を与え、入試3科目中最も評価点の低かったものと振替えられる制度）等の導入をはかりたいと考えております。

また入試を1次、2次とも2回行ない、1回目はいわゆる“受験勉強”向きの試験問題に対し、2回目は“一般常識”向きの試験問題を配し、どちらの成績も同等に評価しようとしていること、また推薦入学志望者には小論文試験を課すとともに面接を行なうこと等々、「多摩大学に最もふさわしいものは、個性と活力と向上心に満ちあふれた青年」というアピールの実現に關係者全員が日夜頭をひねっております。諸兄姉に何かよいお考えがありましたら、是非お聞かせ下さい。

しかし目下の小生の懸念は、入試の方法より、むしろ入試を完全に実施するための人員確保と体制整備に向けられている事情も御理解下さい。実はこの方がずっと深刻な問題なのです。

とくに教員予定者の方々に
各 位

野 田 一 夫

早いもので10月も末となりました。すべてが順調にいけば、あと2カ月で多摩大学の設置が正式に認可となります。何回も強調させて頂きましたが、認可から入試までには1カ月余りの時間的余裕しかなく、しかもその間に“暮と正月”が入ります。したがって、開学準備の担当者は、認可以前にやれることはすべてやり尽くしておこうという意気込みで、日夜頑張っております。何卒関係者各位も開学センターからの御依頼には、快くかつ迅速に御協力賜りますよう御願い申し上げます。

現在、教員予定者の方々には、広報の責任者である望月照彦君より入学案内書に掲載する一文（わずか300字）と写真1枚をお願い致しておりますが、まだ御送り頂いていない方は是非とも早急に御願いしたいものです。何しろ年末をひかえ（それに天皇の御不例という不安定材料をかかえて）印刷には相当な日数を予定に入れざるをえません。どんなことがあっても、12月中・下旬の正式認可時点には、多摩大に関しては各方面宛の印刷物が完成し、弓から矢が放たれるごとく一斉にポストに投函されるのが目標です。「郵便局が隣りにあったからここに開学センターを置くことを決めた」と小生が強調して参ったのは、決して冗談ではないのです。

ところで、お願いをひとつ。自己紹介の一文も写真も、他人行儀で固苦しいものはどうか避けていただきたいものです。たとえば望月教授ならいかにも建築家らしく工事現場でヘルメットをかぶって技術者を指揮しているとか、日下公人教授ならテレビで対談しているとか、井上伸雄教授ならNTTの中央研究所で最先端の研究に没頭しているとか……といったものが歓迎です。一文の方もまた、300字の中にその方の個性を思う存分輝かせて下さい。

何かいいお知恵は？

各 位

野 田 一 夫

Rapport も今回で49号、多摩大学の開学責任者として目下小生が49に因み、“四苦八苦”していることを御披露し、是非とも諸兄姉の御協力を頂戴したいと希い、この一文を草します。

多摩大の広報活動は何といつても「入学案内書」と「ポスター」が軸になる予定です。その他の広告媒体、たとえば新聞とかテレビももちろん考えましたが、予算の関係で“コスト対効果”の上から余り期待できません。期待できるのは、マスコミで実績のある教授陣の協力による、ごくさりげない形の“パブリシティ”のみで、これに関しては改めてご提案をいたし、また組織的にご協力をお願いしたいと存じます。

さて、「入学案内書」ですが、この呼び方ではいかにも野暮ったく、多摩大オリジナルのもっと洗練された名称がほしいのです。すでに同種の印刷物に関し、外国の大学等で称している名前でもいいですし、あるいは意味不明ながらゴロのいい和製外国語でもいいのです。なお、入学案内書の内容は①建学の理念、それを具体化する形の講義内容等、②卓越し、かつ個性的教授陣等、③環境と建学理念にマッチした建物・設備・サービスシステム等です。

いま一つはポスターの図柄です。現在関係者の間で最有力となっているのは、教授全員が理事長を囲んでにこやかに集っている写真の上に「さよなら偏差値、さよならマスプロ教育、その名は多摩大学」というキャッチフレーズが印刷されたものですが、小生としては、この発想はともかく、写真もキャッチフレーズもいまひとつの感にとらわれます。

何れにせよ11月15日までには案内書、ポスターとも版下へ廻さなければ、かんじんな12月中・下旬の認可までに入学案内書やポスターの印刷を完了できなくなります。何卒、御知恵をお貸し下さい。

各 位

設置申請業務全て完了

野 田 一 夫

先週、11月2日、田村理事長と御一緒に文部省へおもむき、多摩大学設置申請に必要な最終資料を提出しました。想えば糸余曲折に富む2年間でしたが、今は「人事を尽して天命を待つ」というすがすがしい心境です。

多摩大学は学生の収容定員からみても、キャンパスの広さからいっても、たしかに小さな大学ですが、他方、設立業務をすすめるに当っては高邁な理想と明確な方針を一貫して堅持しつづけてきましたから、建築・設備・サービスシステムの面からみても、また教育方法・教科内容の面からみても、これまでの日本のどの大学にもなかったかずかずの個性的特徴を具備して発足できるものと自負しております。

御承知のごとく、大学の設置は政府の認可事項に属し、とくに68年度以降長期的に見込まれる大学経営環境の悪化を前提として、審査はこのところ厳しさを一段と増しておりますが、小生の接したかぎり、文部省の担当官の方々はただ一人の例外もなく終始実に熱心かつ親切に多摩大学の設立に関し行政上の指導に当られました。文部省の担当官はきわめて保守的かつ教条的であるとかねがね聞いておりましたが、小生の経験では全く逆で、時代の動きを十二分に察知されており、私共の主張に対しても実に柔軟かつ前向きに対応され、可能なかぎり多摩大学の個性的特徴を実現できるよう協力して下さったことには敬服しました。

小生は、多摩大学が新設大学として文部省の期待にも十分こたえられるという、強い自信をもっています。決して強がりではありません。来る12月中旬、多摩大学が正式に認可され、その多彩かつ強力を教授陣容が公けにされた時、誰もが同じ気持をもって下さることが、小生にとって今からひそかな楽しみです。

校舎建設工事急ピッチ

各 位

野 田 一 夫

日曜祭日におひまでもあれば、是非多摩大学の工事現場を見に行って頂きたいものです。工事がいかに急ピッチで進められているかは、他の工事現場に比べて投入されている建設機械と人員が圧倒的に多いことから、すぐおわかりになれます。私の友人はややオーバーに「正に、万里の長城の建設もかくやあらん」と表現したほどです。

この工事が着工されて間もなく、用地の地下8メートルのところに横たわっている浄水場建設時の廃材が多数土中に残されていたことが発見され、それらを取除くために、工事は壁にぶつかりました。おかげで今年の長雨にもたたられ、結局、基礎工事の段階で約1カ月半遅れが出たわけです。

校舎建設工事の進捗状況は、文部省の大学設置認可にとって重要なチェックポイントの1つです。今だから申し上げられますぐ、このため秋口には、関係者の顔は一様にくもりました。しかし御安心下さい。10月以降事態はすべて解決し、加うるに天候も安定して、遅れは一挙に取り戻されつつあります。

来年3月下旬には、多摩大学は、眺望絶佳の多摩丘陵の最高地点に、その全容をあらわしてくれる筈です。規模は別としてそれは、日本の大学としては全体的に建物の質が上等な上に、すでに御送付申し上げた案内書でも簡単に御説明しましたように、当大学の教育施設・設備はいろいろな点でユニークだと、ひそかに悦に入っています。

しかし校舎は教育施設である以上、問題は使い方であり、使われ方です。かの「松下村塾」はまことに粗末な建物でしたが、短期間の間に考えられない程の人材を輩出しました。私共教授陣は来春以降、関係者の方々の御理解と御協力のもとに、この誇るべき校舎で続々と素晴らしい教育成果を挙げていきたいと念願しています。

理念としての产学協同

各 位

野 田 一 夫

日本の大学の中で多摩大学の特色は、専任教員の経験が極めて多彩であることあります。すなわち、教授予定者23人中何と15人の方々は、いわゆるアカデミズムの世界の外で、会社、銀行、商社、新聞社、シンクタンク、公益法人……に勤めた経験の持主です。残りの方々も、大半は日本のアカデミズムに疑問ないし限界を感じて、外部社会と（コンサルティングとかリサーチ・プロジェクト等を通して）進んで接触をもちつづけてきたように思われます。

したがって多摩大学は、日本の大学として初めてではないにしても、产学協同を建学の理念として堂々と打出せる数少ない大学になれる筈です。日本の大学教授の多くは、“产学協同”に原則としてネガティブな態度をとります。なぜでしょう。それは彼らが産業界に本質的偏見ないし劣等感をもっているからではないでしょうか。協同とは本来、力関係が同等な者同士の間でしか成立しません。それなのに、日本の大学の多くは、組織体制はもとより、資金・設備・施設面でも、また人材面においても、産業界の主要各社に比しあまりにも無力です。この点は正に米国一流大学と対照的といえます。

だからこそ、日本の大学教授は、とかく世を拗ね、他を妬み、そうした心情をあえて否定するために“真理の探求”とか“学の蘊奥”とかいう空ろな観念の世界に逃げこもうとするのです。多摩大学はどんなことがあっても、こうした卑屈な存在になり果てることがあってはなりません。多摩大学は、全教授陣1人1人の知恵と努力を結集した教育と研究の成果により、自力で社会的に高い評価を受け、産業界に対してもあくまで対等の立場を堅持しつつ、是々非々の相互信頼のもとに永遠によき関係を保ちつづけたいものです。

Viva! Rapport 1周年

各 位

野 田 一 夫

Rapport 第1号が諸兄姉に向けて送られたのは、昨年12月1日、火曜日でした。以後 Rapport は、1回も欠かされることなく、毎週火曜日に発送されつづけてきましたから、今号で Rapport は1周年を迎えます。第1号の標題は「開学まであと487日」でした……ということは、何と多摩大の開学までに残された日数は、わずか124日しかないことになります。

今日、いつも手元に置いてある Rapport の全号を久しぶりに独りで読み直してみました。建学の理念のこと、校舎の建設計画のこと、学園歌のこと、組織体制のこと、教育方法のこと、教授に期待される役割と待遇のこと、入学試験のこと……と読み進むにつれて、はじめはいささか小生の心の中にあった過去への感傷は消え失せ、今後百数十日間に現実化するいろいろな事柄への不安と希望との入交った妙な気持に襲われました。

多摩大学の関係者全員の希望である大学設置の認可は間もなく下りるものと信じます。堰を切ったように、暮も正月もなく広報活動が開始され、2月初旬と3月の初旬2回に分けて入学試験が実施されます。多摩大学の栄ある第一期生となるわけですから、私共の資質基準に沿った人材を何としても所定の人数だけ、しかも何十倍という志願者の中から選考したいものです。

一方、基礎工事の遅れで私共をヤキモキさせた校舎の建設が進むと、優雅にして質感高い建物の外形にふさわしい設備と内装を、計画した通り完成させねばなりません。そして4月、入学式とともに多摩大学が本格的に活動し始めます。教学と事務の両輪が経営という強力かつ信頼できるエンジンによって回りつづけてこそ、多摩大学の理想の実現は少くとも4年たってたしかめられるのです。多摩大学の前途を正に祈る気持です。諸兄姉のますますの御協力を御願いします。

最も効果的な広報活動

各 位

野 田 一 夫

多摩大学の設立に直接たずさわっている関係者にとって、眼下最大の関心事は入学試験です。新生の多摩大学にとって望ましくかつふさわしい人材とは誰なのか、またそうした人材を選考するためにはどうしたらよいのか、についてはすでに関係者の間で何回も議論が重ねられた末、具体的な入試準備が着々と組織的に進められております。

しかし、どんなに周到に入試の準備が進められても、他方で多摩大学の魅力ある存在が受験生の間に広く周知徹底され、それによって多数の志願者が多摩大学へ押しかけてこなければ、私共は“第1期生”として自他ともに誇るに足る資質を備えた人材を目一杯確保することは不可能です。そこで、近く大学設置が正式に認可されるとともに、私共が総知総力を傾ける必要があるのが“広報活動”です。

広報活動といえばすぐテレビ、新聞、雑誌等のいわゆる“媒体”が頭に浮びます。多摩大学では、これら媒体を用い予算の範囲内において各種の広報活動をこれまで行って参りましたが、何といっても広報効果の大きいものは、多摩大学に期待を持たれる方々による“口コミ”であると信じます。

多摩大学がいかに独自の設立理念をもち、いかに恵まれた地に立地し、いかに考えぬかれた施設・設備をもち、そして何よりも、いかに充実した教授陣をもっているか……、こうした事柄がそれぞれに社会的影響力をもつ方々によって折にふれて周辺に伝えられること、このこと以上に多摩大学の知名度を高め、信用を増す方法はありません。

もちろん、これらの方々にそのようなことをただ期待することは許されません。私共は必ずしや来年以降、あらゆる点でこれらの方々の評価に耐える大学を是非とも実現したいものです。

そろそろ年間講義案を
各 位

野 田 一 夫

Rapport-22 で「年間講義案」を提案させて頂いたのをご記憶ですか？ 多摩大学の教員は全て、各自の 1 年分の講義案を事前にかなり詳しく作成し、しかも、関連する教科目を受持つ教員同士で十二分の調整を行った上で、毎年 4 月の始業時には印刷された「年間講義案集」として学生に配布し、この案に従って全教員が計画的、組織的に整然と 1 年間の講義を行って頂きたいのです。

こんな当たり前のことですが、日本の大学では全然行われてこなかったのは、1つの驚きです。日本の大学では、講義は学生のためになく、まるで教員のためにあるのが普通でした。すなわち、カリキュラムは時代の要求と関係なく、過去の慣例に従って組まれる上、各講義は相互の関連性など無視したまま、各教員の専攻領域とか研究関心本位に行われるのが普通です。加うるに、日本の大学の教員には、教育者としての技能・熱意等が、その資格要件としては問われません。これでは学生はたまたものではありませんし、こうした教育を受けた学生を受容れる社会の納得を得られる筈はありません。

多摩大学は新設の大学であるが故に、敢て日本の大学のこれら慣習に挑戦し、“21世紀の大学”への新しい途を拓こうではありませんか。文部省によれば、大学の 1 年間の授業期間は 35 週ですが、何かと休校を余儀なくされるわが国社会の現状では、1 年間 1 回の休講なく講義が行われても、その回数はまず 30 回をこえることはありません。

そこで各教員にお願いですが、各自の 1 年間の講義を 30 回に分け、1 回 750~780 字(ちょうど Rapport 1 回分)で 1 年分の講義案をまず作成して頂きたいのです。とくに来年度から出講の方は、とりあえず来年 2 月末日までに作成をお願いします。

皆さん、本当にありがとうございます
各 位

野 田 一 夫

すでに昨週末のテレビニュースや新聞紙面でご承知の方々も多いかと存じますが、文部省大学設置・学校法人審議会が16日に行った「昭和64年度公私立大学・短大の新增設認可についての答申」の中に多摩大学が新設大学の1つとして含まれてありました。この答申を受けて22日午後、中島文部大臣が田村理事長に大学設置認可書を手渡された時点で、多摩大学は晴れてこの世に誕生します。

16日の夕刻、ある講演を終えて紀尾井町のオフィスに戻り、秘書の吉田から「多摩大学の設置認可が答申されました」という報告を受けた瞬間、ありきたりの表現ながら、やっと長かったそして重かった私の肩の荷が下りました。早速認可申請期間中とくに御世話になった方々に次々と電話で御礼を申し上げていると、丁度この日約束をしていた友人がやってきました。旧制高校以来の親友中の親友です。彼と足どりも軽く宵の赤坂の街へ出ました。夜寒の風も一向に感じぬまま弁慶橋を渡り目的の店へ着くと、早速ビールを注文、そして何よりもまず乾盃！正に胃の腑に沁み入る冷たく、美味しいビールの一杯でした。間もなく、待ちに待ったヒデさん（中村秀一郎氏）が例の何ともいえぬニコニコ顔でジョイン。周囲のザワめきも加担して、席は更に盛り上り、われら60代大いに飲み、食い、語って、いつしか時の経つのも忘れた楽しい夜でした。

想えば、一昨年の丁度12月はじめて文部省と接触して以来2年間、私立大学の設置認可としては最短期間であっただけに、開学準備を担当された方々の苦労は誠に筆舌に尽くし難いものでした。またこの間周辺の方々から頂戴したご助言、ご激励は1つ1つ忘れません。

皆さん、本当にありがとうございました。

当面の 2 大課題

各 位

野 田 一 夫

22日の午後文部省高等教育局長室で、田村理事長は国分局長の手からたしかに「大学設置認可書」を頂戴致しました。ここに、多摩大学の正式誕生を謹んでご報告申しあげます。

さて、陛下の御容体を気遣ってか、今年は年末の街にひびくクリスマス音楽の音は例年よりひかえ目に感じられますが、それでも変わぬこの季節独特の賑いと慌しさの中で、小生の心には 2 つの課題が去来しつづけています。

第 1 の課題は“入試”です。多摩大学が対外的にはすでに社会的に認知された機関として、また対内的には形成途上の組織体として、最初にとり組む一大プロジェクトです。だからこそ、私共はこれを完成に成功させねばなりません。入試の完全な成功とは、①絶対に不祥事を起さぬこと、②好ましい人材を妥当な数だけ新入生として確保しうること、の 2 つです。

第 2 の課題は“開校”です。多摩大学の開学は来る 4 月 1 日ですが、開校は 4 月 14 日（金曜日）の予定ですから、残された約 3 カ月の間に私共は①校舎の工事（本体、設備、内装とも）を世間に公表した通りの形で立派に完成させねばならぬとともに、②この校舎（ハードウェア）を使って新入生とその父兄が真に満足するに足る教育を整然と実施しうるサービスシステム（ソフトウェア）を確立し、運用せねばなりません。

前者（工事）に関しては、主に熊谷組をはじめ業者の方々を督励するほかはありませんが、同時に、業者の不安を除き、意欲を高めるために施主としてできる事をどしどし決断していく必要があります。後者（サービスシステム）に関しては、その成否は全て私共の知恵と努力の結集の仕方にかかっていることを銘記すべきです。どうか変わぬご理解とご助言を……。

諸兄姉御一家の平和な年の瀬をお祈り致します。

C I または U I

各 位

野 田 一 夫

新年を迎え、諸兄姉ますますご健勝のことと拝察申上げます。わが国産業界ではこの10年ほど、C I (Corporate Identity)と呼ばれる経営手法が広く各社の関心を集めてきました。この手法はもともと世界的大企業IBMが案出し、そして成功をおさめたことによって俄然各社に注目されるようになりました。

本来C Iは企業規模が増大し、活動分野が拡散するにつれて、“企業イメージ”が社外の人々にはもちろんのこと、社員の間でもはっきりしなくなってくるという事実を踏まえて発想されたものです。つまり、企業の Identity を明確にすることによって、企業成長に伴なうもろもろのデメリットを克服し、ひいては更なる発展へのトリガーとするのが目的です。

何かについてイメージの形成には、視覚的・外見的なものが大きな役割を果しますから、C Iにも商号・商標、シンボルマーク、ロゴタイプ等々のデザイン計画がつきものですが、実は米国はもとよりわが国でも、C I のの展開は、単にデザイン戦略の域を超えて、次第に経営理念、組織体制、ひいては企业文化といった次元にまで活動領域をセリ上げてくるとともに、他方、本来は企業の経営手法であったものが、学校、病院、官庁といった機関の組織活性化とか活動成果の増進のために採用されるようになってきました。

大学のC IをU I (University Identity)と呼ぶ人もいますが、とにかく大学、とくに日本の大学は経営(管理)の後進分野であるだけに新規経営手法の効果も大きいらしく、いくつかの先駆的大学ですでにそれなりの成功を収めています。多摩大学は新設でイメージが未形成だけにU Iはやり易い反面、やり方如何では将来に久しく悔を残しかねません。諸兄姉から多摩大学のU Iに関し、御意見、御示唆を頂ければ幸甚です。

平成元年開学
各 位
野 田 一 夫

正月休暇で滞在中のプリスベンで、天皇崩御の報に接しました。昭和2年生れの私にとって、過去60有余年の人生は何かにつけてこの天皇とのかかわりをもって過ぎてきたことを改めて想い返し、しばし深い感傷にふけった次第です。

しかし、時代は改ったのです。新しい時代には大きな希望がひらけている感じがします。私共の多摩大学は偶然にも平成元年4月に開学することになりました。幸い受験生の間では多摩大学への关心と期待は予想以上に大きいようで、開学センターで働くスタッフは昨年末以来、入試に関する問合せや資料請求への対応にそれこそ猫の手も借りたい忙しさです。

多分今日（10日）から、首都圏のJ R、私鉄、地下鉄等の主要駅には一斉に多摩大学のポスターが貼られる筈です。その図柄は、すでに昨年皆様にお届けした「案内書」の表紙のそれと同じく、専任教員一同がてこやかに勢揃いした写真です。手前味噌になりますが、この図柄は、発想、一同の顔付、背景の漆黒色……とすべて評判上々で、これによって受験者数は少くとも数十パーセントは増加することになりましょう。

本大学の収容定員は当面わずか160名にすぎませんが、だからこそ私共は、できるだけ多数の受験生の中から“多摩大学第一期生”といえるにふさわしいツプよりの人材を、選びたいと考えております。つまり受験生は多い程希わしいですから、私共関係者にはいま、時間、予算、人手……といった数々の制約の中で最も効果的な広報活動の推進が求められています。そこで、関係者以外の方々に対してもお願いがあります。どんなことでも、またどんな形でも、多摩大学の広報のためになると判断されたなら、是非とも積極的にお知恵なり、ご助力を賜わらんことを……。

公約と責任

各 位

野 田 一 夫

先週“13日の金曜日”の午後、京王プラザホテルで、首都圏にある高校の進学担当の先生方を対象とする「多摩大学説明会」を開催しました。出席者は予定を約50人程上廻り、300人の先生方が終始熱心に私共の話をきいておられました。質問も活発であった上に、説明会終了後のパーティーの席上でも大勢の先生方が次々に小生のところに来られて歓談され、例外なく多摩大学に非常な好意と関心を抱いて下さったようです。

ところで、この好意と関心の源泉は多摩大学の新鮮にして高邁な経営理念とその理念を実現していくための洗練された充実した設備、よりぬきの教授陣、多様性と一貫性を併せ満足させる教科内容、“年間講義案”的採用にみられるよう学生本位の教育法、偏差値にかたよらず個性と潜在力を重視した入試……といったものにあったことを、私共関係者はよくよく心に銘記すべきだと思います。

説明会に御出席の先生方は、私共のいわば天下に掲げた“公約”に大きな期待を抱いて下さったわけです。いやこれらの先生方だけではありません。私共がこれまで口であるいは文字で語ってきた多摩大学に期待して下さった方々はすべて、私共の公約を信じておられるわけです。一方、多摩大学の建物は目下建設中です。入試は受付が始ったばかりです。開学・開校は4月です。ですから、多摩大学を今年受験する学生および父兄の方々の期待と信頼はとくに絶大といえるのではないでしょうか。

今私共は、大きな責任を負っています。キャフェテリアや図書館は設備にふさわしく運営されるのか、年間講義案に沿って授業は整然と行われるのか……こんなことを、小生は改めて考えつづけています。欧米では最も忌むべき日とされる“13日の金曜日”が、わが国では幸運の約束された日であることを信じつつ。

入学志願者殺到！

各 位

野 田 一 夫

開学センターでは目下入学試験業務で全員がてんやわんやです。すでにご承知の通り多摩大学の入試は2月上旬（第1次）と3月上旬（第2次）の2回に分けて行われますから、現在の受付業務はもちろん第1次に関してですが、定員120名のところ、昨日現在で入試申込数（銀行振込ベース）は何と3,541名に達しました。受付締切日の25日で名目倍率は確実に30倍を超すと思われます。とにかく大変な数で、受付業務の忙しさは十分ご推察頂ける筈です。開学センターでは毎日夜遅くまで仕事に追われている方々の労を心からねぎらいたい気持です。

Rapportでもすでに申し上げたことがあります、私共が多摩大学の第1期生として真に望む人材を確保するためには、当然私共の理念と方針に沿った入試を完全な形で実施することが前提です。しかし志願者が少ない場合には、どうしてもよりすぐれた人材の確保はそれだけむづかしくなります。では志願者は多い程よいのかと問われると、これはまた疑問です。卒直に申して現在の事務体制では入試業務の処理能力に自ら限界があるからです。恐らく限界は3,500～3,600人、つまり定員の30倍ぐらいと私共は踏んでいました。ですから目下小生は、3日後の締切り日に志願者の数がこの限界を著しく超えないようにと、まことに贅沢な心配にとりつかれている次第です。

しかし万事、ことが順調に行っている時ほど怖いものはありません。「勝って兜の緒を締めよ」という諺もある通り、私共はこういう情況の中でこそ気をひきしめ、完全な入試を完遂したいと念願しています。新設の多摩大学が、わずか3週間の広報期間で、これだけ広く世間から注目される事ができましたのは、ひとえに諸兄姉の御協力によるものと考え、責任者として心から御礼を申し上げます。

今こそ組織体制の確立を
各 位

野 田 一 夫

本学入試（第1次）の志願者数は最終的に3,926名、定員に対する倍率は32.7倍でした。当初私共は第1次志願者数を2,500名程度と想定していましたから、結局予想を大幅に上廻る志願者があったわけで、関係者は一様に胸をなで下しています。入試結果判明後、合格ラインをどこで引くかという判定の困難さが一層増した悩みはありますが、何れにせよ合格者数の調整は第2次入試に委ねることとして、多摩大学1期生には相当な人材を揃えられるメドがついたことを喜びたいと思います。

ところで2月・3月は、一方では入学試験、他方では校舎の建築という2つの課題が私共の最大関心事です。しかしこれら2つの山を越すといよいよ4月、待望の多摩大学の開学です。入試とか建築ほどハッキリした進行の目安がないせいか今のところ関係者全員の関心事になっておりませんが、私共には今1つ大きな課題が待っていることを忘れてはなりません。それは、開学後の“組織体制の確立”です。

私立大学の構成員は、狭義には大別して、学生と教職員とに分れます。学生は授業料等を納付することによって、大学の経済的基盤を主として支えてくれるわけですから、彼らが大学で充実した学生生活を実感しうるかどうかは、大学の評価を決定的に左右します。教職員はその意味で、大学において果す職能は異なれ、何よりも大学の第1次評価者である学生に対して直接的・間接的サービスを行なう立場にある点で共通しています。新設の多摩大学は、これまで当面の課題の解決に追われつづけてきた結果、卒直に言って、教育面においても学務面においても、また経営管理面においても、組織体制が未整備です。私共は今こそ大学を安定して運営しうる組織体制の確立に総知を結集しようではありませんか。

再び「年間講義案」について

各 位

野 田 一 夫

いま今週のRapportの筆を執ろうとして、Rapport-61の標題「入学志願者殺到」の到が倒となっていることに気付き、赤面致しました。こうしたケアレス・ミステークは、教育を業とする者には許されないことと常に心に念じてはいるのですが……。

ところで、Rapportで小生はすでに過去2回多摩大学の全教授の方々に「年間講義案」の作成方を提唱致しました。年間の講義回数を30回として、1回につきこのRapport(750~780字)程度の概要を1年分つくることは誰にとっても決して容易ではなく、ある親しい教授は小生に「僕は多摩大学を逃げ出したいよ」と冗談を言わされました。にもかかわらず、小生はやはりこれにこだわらざるをえません。学生にとってよい講義とは①内容があって、②体系的で、かつ③面白い、ことではないでしょうか。③については天賦の資質差があるとはいえ、やはり教壇に立つ者の心得として、各人が口語表現法の上達に励めば、誰でも、面白いとはいえないとも“解り易い”講義はできる筈で、日本の大学教授の実に多くが一生このレベルにすら達しないことは、驚きといってよいと思われます。

上記①と②で個人差があるとすれば、その原因は天賦の資質ではなくて、配慮、責任感、努力……といった人間的属性ではないでしょうか？教科目は異っても、内容のない講義、あるいは通年で体系的でない講義は、結局学生の向学心を削いでしまう点で排されねばなりません。さらに関連性のある教科目の講義内容が教授間で事前に調整されていれば、学生にとっていかばかり心強いことでしょうか。そのためには、多摩大学では日本のどの大学も実施していないこの制度を実施したいのです。とくに“管理教育”を望むわけではありませんから、年間講義案の分量や様式は各人異ってもかまいません。多摩大学は大学として当然やるべきことを率先実行したいだけです。

青年の期待に応えよう
各 位

野 田 一 夫

きのうの午後、多摩大学第1次試験の合格者発表が付属聖ヶ丘高校ありました。工事の進捗状況を視察かたがた熊谷組の現場責任者と打合せに行くために、私は3時半頃たまたま掲示板の横を通りがかり、相当数の受験生がくい入るような眼で自分の番号を探している姿に痛く胸を打たれました。

すでにお報せした通り、1次の名目倍率は約33倍でしたが、手続率を約50~60%と踏んで、成績上位204番までを合格者として発表しました。それにしても実質倍率は約20倍です。正に狭き門です。入学者も志を達しえなかつた志願者も新設の多摩大学に一体何を期待してかくも集つたのでしょうか。

名声や社会的評価が未だ確立していないだけに、多摩大学にしてつかんだ情報、たとえばユニークな建学の精神、充実した教授陣、斬新にして快適な設備、めぐまれたロケーション……といったものが彼らを魅きつけた筈です。そして、難関であつたが故に、それなりに優秀な青年が、期待に満ちてやがて入学してくるに違いありません。父兄もまた喜んで多額の入学金・授業料等を子供のために支払うわけです。

彼らや父兄のために、私共教職員は大きな責任を負うことになります。私のみるところ既成の日本の大にはこの责任感がひどく稀薄なように思われます。確立された名声や社会的評価の上に安住し、倍率や偏差値の高さにおごって己を裁定者の立場にあるがごとく誤認しています。結果として、実もなく、面白くもなく、情熱も感じられぬ講義の連続、貧しい設備とサービスから来る味気ないキャンパスライフ……。いつしか向学心を失った青年はレジャーに心を奪われ、大学生であることの自覚はただ単位取得と就職試験だけという情ない状態に陥ります。多摩大学は絶対に既成の大学の轍を踏んではなりません。

ゴクミ効果

各 位

野 田 一 夫

今朝のスポーツ・芸能紙はこぞって「ゴクミ多摩大学附属聖ヶ丘高等学校合格」と大々的に報じました。何しろ“国民的美女”としてつとにテレビ、映画を通して若者の間で圧倒的人気を拍している女優だけに、マスコミの熱い注目を浴びたのは当然と思われます。ただ、彼女があまたある高校の中で聖ヶ丘高校を志望した理由のトップに、附属高校として多摩大学に直結していることを挙げていたことが、ひどく気になりました。

ご承知のごとく多摩大学の収容定員は、新学部でも増設しないかぎり、当分160名です。それを30%程度プラスして、つまり210名ぐらいまで入学者を受容ることは、慣例として文部省が黙認しますが、それ以上となると、行政としても注意をうながさざるを得ず、そうでなくとも“水増し入学者”的故に大学のイメージと社会的評価は必ずしも下がることを銘記すべきです。一方、聖ヶ丘高校の収容定員は240名（来年以降200名）で、多摩大学のそれを大きく超えていきます。

聖ヶ丘高校から第1回卒業生が出るのは平成3年ですが、それまでに多摩大学の評価はぐっと高まるに違いありませんから、一般入試はますます難関の度を増すとともに、聖ヶ丘高校在校生の多摩大学進学志望者も予想外にふえることが十分考えられます。そこに“ゴクミ効果”が加わることとなると、事態は正に深刻と言わざるをえません。

今年、初年度の多摩大学の一般入試倍率（第一次）33倍は、私共にとって良心的に入試を行えるための上限であったことを考えますと、私共は2年先に予想される事態を見据え、推薦入学（附属高校のみでなく、関係高校、指定高校等を含め）と一般入学双方の現実的にして、かつ筋の通った方針を今から確立しておく必要があると痛感しております。

くり返し「年間講義案」について
各 位

野 田 一 夫

いよいよ明日から3月、4月中旬の開校まで1月半を余すのみとなりました。今年より講義をされる教員の方々は、その準備に余念のないことでしょう。

昨年、教員の方々に再三お願ひ申し上げ、また昨年末には原稿用紙同封にてご依頼致した各講義の年間講義案（本年度分）はすでに80%の方が提出しておられます。未提出の方々の何人からも、電話ないしRapportの返信で案の作成に全力をあげているとのご連絡を頂いておりますので、1～2週間のうちに私は、予定通り本年度の年間講義案が全部出揃うことになると信じます。私見では、大学の評価は結局講義によって左右されます。どんなよい場所にあってどんなにすぐれた設備とサービスシステムを誇る大学でも、そこで毎日行われている講義の質が低くては、すべてがぶち壊しです。

講義の質の高さは教える側の評価基準ではなく、教わる側、つまり学生の評価基準に依ることもまた、改めて強調させて頂きたいと存じます。Rapport-63で小生は、よい講義は①内容があって、②体系的で、かつ③（聴く側に）面白いこと、と定義しましたが、多摩大学の教員はこぞって、毎年よりよい講義の実現を目指したいものです。そのための第1ステップとして有効な方法は、各人が年間講義案を作成し、それらを各分野ごとに相互調整したあとで年度初めに学生に対して配布し、全ての講義がそれに沿って組織的に整然と行われることです。

米国の大学ではとくに珍らしくもないこうしたステップが、日本の大学ではほとんど踏まれてこなかったことはひとつの驚きです。大学は研究機関である前に教育機関であり、大学教授は学者である前に教育者であるというごく当たり前のことを、新設の多摩大学は進んで世に示そうではありませんか。

各 位 パルテノンで入学式
野 田 一 夫

先週は、2日が第1次募集入学手続きの締切日、4日が第2次募集願書受付締切日でした。結果は、第1次募集入学手続きの正式完了者90名、延納届出者47名、合計137名で、延納届出者の正式手続きへの移行率を50%と仮定すると、第1次合格者数は110名強と推定されます。第1次の発表合格者数は205名でしたから、入学手続き率は55~60%と当初予想通りです。

一方、第2次試験応募者数は1407名でした。募集人員は40名ですから、名目倍率35.2倍で第1次をオーバーしていますが、第2次の場合は発表合格者数がせいぜい50~60名であると推定されますから、実質倍率は第2次の方が高いといえましょう。とにかく多摩大学の第1期生が1次、2次ともきわめて高い競争率という関門をパスして選出されたことを、何よりも嬉しく思います。

入試業務が来週一杯で終ると、いよいよ入学式の準備です。入学式は4月14日に大学だけで行う予定でしたが、校舎も使えずまた学生数も少ない状態で第1回入学式をささやかに行っては盛上りも期待できません。そこで多摩ニュータウンの誇る「パルテノン多摩」の大ホールを借り切り、4月10日午後に附属高校と合同で盛大な入学式を行うことと致しました。

「パルテノン多摩」大ホールは完備されたコンサート用のホールですが、広い舞台と1414名の座席は音楽以外のいろいろの目的に利用されています。ここに大学生・高校生700名強、教職員100名強、来賓400~500名が集い、一大入学式が挙行される予定です。多摩大学らしくイベントとしても洗練されたものにすべく数名の委員がひそかに策を練っています。関係者の方々には当日午後の予定を目一杯とっておいて下さるようお願いします。

多摩大型給与体系

各 位

野 田 一 夫

いよいよ4月1日には常勤・非常勤合わせて31名の本年度多摩大学教員人事が一斉に発令になります。経済的報酬が目的で教員になられる方はもちろんおられませんが、他方また、教育の仕事にはそれ相当の経済的報酬が伴なうことも世の常識です。

創業直後の大学の財政事情は決して楽である筈はありませんが、それでも法人本部から私共に提示された給与原資は“東京大学並み”（一人平均地方国立大学より調整手当分だけ高い）でした。これを前提として、小生は中村学部長と知恵をしぼり、①誰もが多摩大の教員となったことで実質的に不利を負わないこと、②どの年令層の平均給与額も、東大を除く東京5大学（早、慶、立、法、明）にヒケをとらぬこと、③誰からみても合理的かつ妥当であること、の3目標を達成できる給与体系を案出しました。

まず常勤者については、多摩大学教員たるもの全員が最低2日間は単に担当する講義またはゼミの時間のみならず、学生の姿の見える限り時には夜までキャンパスで学生に接して頂くことが前提です。だが人によってはそのほか週1日または2日、教育またはその他の業務で大学のために時間を割いて頂くとしますと、上記方針③にもとづき、当然そこにはある程度の報酬格差が生まれてよい筈です。週何日かは各人の自発的選択に依るとして、週2日ないし3日型を選択された方から生ずる余剰原資をとくに30～40代に手厚く配分し直してつくり上げたのが多摩大型給与体系です。いま1つの特色は、非常勤者に対しては東京5大学の平均額を大幅に上廻る給与を確保して、日本の大学の常識はずれの陋習の改革の緒をつけたことです。

私共は毎年この給与体系に検討を加え、自らの知恵と努力で限りなく理想に近い経済的報酬の確保をはかりたいものです。

授業を真剣に

各 位

野 田 一 夫

3月19日の朝日新聞朝刊の「声」欄に、22歳の大学生の「大学の先生は授業を真剣に」という投書が掲載されました。「授業についていえば入学当初少しあは期待していたが、ほとんどうらぎられてしまったように思う。もちろんまれにすばらしい授業をする先生もいる……。(しかし大部分の)大学の先生は高度な知識をもっておられるが、極度に専門化されていて、自分の言葉でしゃべっていない気がする、つまらない概論をくり返す人も多い……。」という一文を読んで共鳴を覚えます。

40年前私が学生であった頃から、いやあるいはそのずっと以前から、日本の大学ではすばらしい授業をする先生は稀だったのではないでしょか。先日読んだ潮木守一著『キャンパスの生態誌』(中公新書)に依ると、18世紀末のイギリスではオックスフォード大学でも大学とは名ばかりで、学生も教師もやる気をなくし、ろくに試験もやらず、学位だけを発行していたそうで、大学の堕落は日本に限ったことではないかも知れません。しかし多摩大学は何としてでも、期待に胸をふくらませて入学してきた学生たちを、教室で満足させたいものです。

“すばらしい授業”とは、必らずしも弁舌さわやかな名講義のことではないのでしょうか。私が何回も申し上げた通り①内容があって、②体系的で、かつ③面白いか、少くともわかり易い、という条件を具備すれば、授業はすばらしいといえましょう。すばらしい授業には年間講義案が必須のものですが、それも休講が多くては台無しです。休講が多く、教師は休講を気にかけず、学生は休講を大喜びするのも日本の大学の奇妙な特徴のひとつです。多摩大学では、単なる補講ではなく、さまざまな方法で休講を絶滅したいと念願します。休講防止のご提言をお寄せ下さい。

いよいよ開学
各 位 野 田 一 夫

いよいよ来る4月1日、多摩大学は開学の日を迎えます。この日はちょうど土曜日のため、組織体制の発表や人事の発令は同日付で行われるもの、教職員の顔合せや仕事始めは来週になる予定です。しかも校舎建設工事の遅れのため来週には鶴牧の開学センターから新校舎への引越し業務が予定されており、大学が本格的に活動を開始するのは4月10日の入学式以後にならざるをえません。

すでにお報せした通り、入学式は多摩センター駅前の「パルテノン多摩」で附属聖ヶ丘高校と合同で挙行致します。「パルテノン多摩」は多摩市民が誇る本格的多目的ホールで、目下のところ都下西部には、環境、規模、設備でこれに比肩しうるホールはありません。“多摩”と名乗る以上、私共の大学が第1回の歴史的入学式を催おす場所はここ以外にありません。

私共は十分このことを意識し、すでに大学側と高校側それを代表する若干名の委員が入学式の斬新な内容、スムーズな運営方法、綿密なスケジュール等々を練りあげているところであります。「パルテノン多摩」を使う以上、このホールの雰囲気と機能を最大に生かした劇的入学式を完璧に実施してこそ、多摩大学関係者の士気は上り、また社会における多摩大学の望ましいイメージの形成が期待できます。

一般に大学は入試とか就職といった個別的目的のために何千円、何億円といったまとまった額の広報費用を予算化していますが、その大学の関係者がこぞって“広報意識”をもち、大学の活動のあらゆる機会を捉えて大学の望ましいイメージ形成努力を日常的に払いつづけていなければ、広報費のコスト・ベネフィットは極めて低いに違いありません。その意味でわれわれは、今回の入学式を是非とも成功させたいものです。

回顧2年4ヶ月 — ひとつの終結

各 位

野 田 一 夫

ご承知のごとく Rapport - 1 が発送されたのは一昨年の12月1日、文部省から多摩大学設置の1次認可を受けて数ヶ月後のことでした。小生が新大学設立の責任をお引受けしたのはその前の年の12月のことで、その際には率直に申して、正式の(2次)設置認可までの途は限りなく遠くかつ峻しく感じられたものです。翌年秋いよいよ2次認可申請業務に入りますと、それまでよりは関係者の数が一段とふえていきました。そこで小生としては、何か縁あって多摩大学の設立にかかわりをもつた方々との定期的交流をはからねばならないという気持にひどく駆られ、毎週往復ハガキを使い Rapport を書きつづけたのです。

実は Rapport という試みは、小生にとって今回が最初ではありません。小生はこれまで新しく生まれる事業の責任者をした経験が何回もあります。その際、①責任者には当然あらゆる情報が集中しますが、②組織体制が未確立でかつ関係者は多かれ少なかれ“寄り合い世帯”であるため、必要最少限の情報さえ伝達がむつかしく、そのため③関係者の間にはおのずから不安、不満、無関心……といった状態が生じやすいこと、を痛感しました。そのため新事業をスムーズに発足させる最も簡便な方法として小生が案出したのが Rapport に他なりません。

多摩大学の設立、それは小生の人生にとって実に大きな事業でした。しかもそれは、小生の現役時代の多分最後の事業として、実にやり甲斐がありました。設置認可のための文部省との折衝、大学の理念・教育方針、カリキュラムと教授陣、校舎建物・設備の基本構想、校歌・校章、組織体制の確立、広報活動、入学試験、入学式……、2年4ヶ月を経てこれら全ての業務が順次完了した今、小生の Rapport も今号でひとつの区切りをつけさせて頂くこととします。

校紋と校章

校 紋



校 章



小生はデザイナーではありません。しかし多摩大学の設立をすすめるに当り、常に人手は不足しました外部に仕事を托すほどの予算の余裕もないままに、素人ながらデザインしてみたのが、この校紋と校章です。開学を控えてなしくずしに正式に採用されることとなり、大いに面はゆく感ずる次第です。本学では校紋・校章ともとくに使用規定はありませんが、校紋は公用便箋のレターへッド等に、また校章は教職員の公用名刺の耳マーク等に使われることとなり、改めて責任を感じます。何れ近い将来、一流のデザイナーによる新校紋・新校章が制定されることを希望致します。

因みに校紋は、田村家の家紋「違ヒ鷹ノ羽」をもとに案出させて頂きました。多摩大学の設置母体は学校法人田村学園ですが、田村学園の創立者は、現理事長田村邦彦氏のご尊父田村國雄氏です。小生としては田村國雄氏の偉業をたたえ、つつしんでこの校紋を捧げるものであります。一方、校章は光を象徴したものです。多摩大学を創設するに当り、多摩を象徴するものをいろいろ探しましたが、遂に見つからず、この大学に集う青年の輝かしい未来を表現して、この校章をデザインしました。学生一人一人がこの校章に恥じない人生を自力で創出して下さることを、切に祈るものであります。